

明治二十八年

おさしづ

(明治二十八年)

△明治二十八年一月十四日内務省より浪花新聞の件
に付橋本氏東京行き伺

さあ〜事情尋る處、いかなる事情も尋る、事情もつて尋る、
事情一寸どういふ事であらう、なんにもあんじる事もいらん、
これだけひろがり、世界どんな事をいふわけのわからん子供が
んぜない子供がほしうて〜ならん、こはい事も何にもない、
心をゆつくりもつてものをやるにも、あすやるこしらへてやる
心ばえ、なにほどむりをいふやる云はし、風ふくやうなもの、
東風も吹き、西風もふく、元々の地場、元々の親がふんばつて

あるからだん／＼理がきこえる、元をだしてふれまはる、かういへばかう、今一時でこす處さとしよう、もの事せいていかん、おめもおそれもいらん、行てだんじをしてよい／＼といへばよいので、よいで一つ理が定まる、それより理がきれるものである、理を取てしもふたら、それぎり事情一時にもつて一つの心をさめてくれるがよい。

△明治二十八年一月十八日中山重吉氏普請之御願

さあ／＼尋ねる事情、さあ／＼事情一つかうしてかうといふ事情は何時にてもゆるすによつて、まあしやんあんしん心一つをさめ、なんでもといふ、一だんそれ／＼／＼だんじ、一だん二だんかうといふところあんしんといふ心定め、事情は何時にてもゆるすによつて、もう一つをさめてかゝるがよい。

△明治二十八年二月五日寺田半兵衛頭痛、たきせき

でるに付願

さあ／＼尋る事情、さあ／＼心得ん、事情尋ねる處よぎなく事情、尋る身上事情、身上一つようき、わけ、たいはん一つこしてこれまでどんな道も通りきたる處、よう／＼一つそれ／＼皆々心どんな道も通り、これから事情だん／＼はじまる。内々に咄して、それ／＼の中あんじた、あんじる事いらん、よぎなき事情これからといふ道一ついかなる事もたのしませ／＼、たんのふ／＼、これより一つさき／＼／＼どんな道もつけてみせる、樂しみに一つの道、これからさき／＼かうである、さき／＼道めん／＼日々日おくり、これからさきいかなる事情もあんじる事いらん、身上もあんじる事いらんで。

△明治二十八年二月十八日中山重吉氏南の方へ普請
致す處圖面の通り申上御願

さあ〜尋る事情〜、ぜん〜もつて事情たづねたる處、一
つの事情一時又たづねる處、それは一つ心の理あるによつて、
心の理にまかせおかう、さあ〜まかせおかう〜。

△木よせ次第とりかゝる處御願

さあ〜事情ゆるしたる理によつて、それは何時なりとりにな
かせておかう。

△明治二十八年二月八日午前十時社寺局より質問の

點之有就ては神道本局へ證明書持參の爲上京前川

橋本兩氏御許願

さあ〜尋ねる事情〜一度の處はどうでもかうでもとは

らにやならん、しゆんがきたるしゆんがおくれてある。

ほつておいてはせかいの理がわからん一寸のかゝりである、な
にもあんじる事いらんでそれはいかんこれはいかんといふやら
う、まがつたときはまがつておくがよい、この世初めたる元な
る處を心にもつていくがよい、せかいから日々云ひたてる、元
々かゝりといふはなにもわからん處から一寸つけかけたるおめ
もおそれる事はないこれもまげあれもまげ理をどこまでまげる
やらしれん、まげたらどこまでのびるともわからん、すつきり
取けしてしもた日もある、理をまげかけたらどこまでのびるや
らしれん、なにもあんじる事はいらん、いさんでゆけ〜。

△しばらくして

さあ二人ともそふだん又一人三名の理をゆるす。

△明治二十八年二月二十五日飯降政甚氏と大阪宮川

小梅との縁談の義運人の心得の願

さあ〜尋ねる事情〜、いかなる事情も尋ねて尋ねにやならん、一時もつて事情、一つの理といふ、これまでかはりた理、なんぼ何歳〜さとする、一つをさまる處、治り事情によつてなるよう行くようをさまつて、事情理はなしして一時もつて尋る、かうといふそれは事情、人一つの事情はいはん、萬事一つまかせる、又一つ第一、一つあちらこちらくもり、尋て行くよう、事情もう一つ、まあ〜といへば事情おくれる、いく〜つくすこれならん、一つ道の爲日々一つはこぶ事情にもならんともいはん、これでこそ道の爲になるとおもへばまかせおかう〜。

△おして願

さあ〜尋かやす處、はんぜんの理いくへ尋ねかやすがよい、ぜん〜はこぶ處はこばにやならん、さき〜そんならよう事情ぜん〜中といふ心の事情あらへば、それより一つあんしん、いかなる理もをさまる、一時をさめる理ではなか〜ほど心がかはりたら大へん、これ一つ聞取てはこぶなら、一夜一つさとし心を定めるなら、あんしんともいふ。

△明治二十八年二月二十七日天明講社八木布教所擔

任岸本氏の處事情有之に付擔任の處本部へ御預り

被下度と申すにより御願

さあ〜尋る事情〜、さあ〜まあ第一、一寸はじめた時は夢みたやうなもの、だん〜年限一つをさまる處、夢みたやう

なもの、だんく理かさなり、一時をさまらんといふ處、よぎなく理たづねる、をさめかた内々からといふ、一寸はゆるしおかう、いつまでといふ事はいかん、めんくせいしんによつてきりかへるといふは、一寸しばらくあづからう。

△明治二十八年二月二十九日神道本局幹事を教長様

に成りてくれとの事で有ますが御許し被下ますも

の哉願

さあく尋る處く、前く事情もつて尋たる、ぜんく事情さしづ、いかなるあきらかなさしづ、どうでもかうでも頼みにこんにやならんやうになるとおもふてゐる、さあ心をきなうゆるすでく。

さあくだんく事情かさなるく、どんな事みな引受てしま

はんにやならんといふ、一つの理さとする、一時どうであらうとおもふ、よう事情聞とつてみなみだんじ一つの心、どんな事情もできてくる、はなし生涯の理つながる、いかなる事も聞く、どんな事もあつまつてくる、ぜんく事情一つの理をさとする、あぶないこはいおそろしいなるといふてさとしある、なるといへばどんな事もなる、ならんといへばなにもならん、なるほどさしづよかつたなあ、心よせば助ける理じやなあ、これがたすかる理かいなあ、世界もたのみこにやならん、日たのもしいみな道といふ、これ一つさとしおく。

さあく尋ねる處く、さあこれは事情かさなつて、一時ずあぶんの理をもつてどうでもかうでもあつまつてくる、一時尋る、まづくの處だんくの理につたへるがよい。

△おし他の方

さあ〜尋る處、二度三度、又一度、まあ〜一つの理、まづ〜の道、これ一つさとしおく。

さあ〜尋る事情〜、おなじ理が三つある、あちらこゝろえん、こちらへはんは、こゝろえのためさしづしておく、ぜひの中の一つ理をもつてをさめ方といふ。

さあ〜もうどうでもの理にせまつてくる、そんならしばらく〜の理はこんでやれ。

△明治二十八年三月二日教祖様墓標臺石仕替ること

御許願

さあ〜尋る事情〜、さあ一つ〜ようこれまでさしづ、あちらをなほし、こちらをなほし、是で生涯事情をさまりない、

これでかうしたらこれでといふ事情はいかん、みんなの心、こゝろだけまかせおくによつて、やつてくれるがよい。

△明治二十八年三月六日梅谷分教會の事に付事情御

願、増野氏宮森氏派出の事願

さあ〜尋る事情〜、さあ〜どうも一つ理がをさまらん、どうも心あはん、日々の處それはどうもならん、おもひたつたる理うしなはんやう、ようき、わけ、どんな道あるも、道なうて道あるも、道なき理とこれき、わけ、これき、わけはをさまる道なうてをさまる理、これき、わけ、一時はどうでとほりにくい道もある、なれどとほりぬけたらあんしん、たのしんでとほられる、これよくさとしてくれ。

△副會長でもおいてといふ處の願

さあ〜、さしづといふ、さしづといふは、もふ一つのりがおさまらねばさしづとゆるん、一つしらべてとくとその上、あざやか、わけてやるがよい。

△明治二十八年三月十二日永尾小人身上御願

さあ〜たづねる〜、尋る處まあ小人といふても、小人〜三ヶ月たつても小人、三年たつても小人、三ヶ月た、ん小人、ふしぎ〜ちがでる事情といふは、どういふ事おもふも、みんなこれ小人つみあるとはおもはれまい、なすともおもはれん、小人十五歳まで親の理でをさまる、この理とりなほしあざやか、どういふ事いかん、き、わけ、いつ〜までの身をもつてむまれたるもの、これ事情さとしおかう。

△明治二十八年三月十三日内務省より事情申來り前

川、橋本二氏上京に付御許の處御願

さあ〜尋る處〜、一つ咄し、又一つ咄し〜、だん〜事情といふ、一つ〜理の聞わけ、一つ〜理のさとり、自由〜、みんなどうとおもふやない、さあ〜理がわかる〜、さあ〜ゆるしおかう。

△兵次郎宅地の處へ石垣堀の御願

さあ〜尋る處〜、かりや〜、一寸〜一寸かりや、さあ〜ゆるそ〜。

△明治二十八年三月十八日午後八時刻限御本席様島

ヶ原より御歸りの晩平野氏目の御障り御願のまゝ

さあ〜やれ〜、ア、やれ〜、さあ〜一時もかへるをま

ちかねた〜、事情のはなししばらく事情をさすから、おちのなきやう十分かき取りて十分の心をさめにやならん、筆がそらうたらはなしかける、こんばんのはなしといふ、事情さすからおちのないやうつけてもらはにやならん、これまでだん〜事情つかへて〜一度すみやかなるさとししたうてならなんだ、一日〜とつとめてゐたからひかへてゐた、十分の心から理をもつて一寸つれてゐた處からはなす、處々國々十分の理がをさまつて心の理をはこぶ、つれてゐたみせた、是から咄しかける、どういふ事情さすなら、みんなつくしてくる中にたれ〜ともいはん、なるほどつくしてゐる中の理によつて是だけのみちおうまい、咄してある、さあ〜上からするやら下からするやらわからん、身上にさわるといふ、身上にさわりのあ

つて尋るから一寸さとしかける、是から一つのはなしするから理はまちがはん、取まぜの内に一二三としるしをうつ、これまで世上といふ、世界といふ、あくたもくたのみち、中にも心にかはらんものもある、是は一つのはなし、是からだん〜はなしする、これまで長い道すがら、長〜はなしどうなりかうなり、處々にはしんじつの理ををさめかけたる、みなをさまる、をさまつてあるのはまことがあつてをさまる、中にはどういふ處もある、是れから一つなほも〜（一本一つ思ひ〜）あらためたうてもあらため、なんでもあらため、たいていはじめかけるが、一といふたら二があとになる三はもう一つあとななる、世界あくたもくたの中、まんに一つも〜世界あくふうあくせつ、此理があふたらなんにもならん日があらう、やう〜

おほくわんあれど、がけみちとほらんならんやうな道があつてはどうもならん、もうはなししようかとおもひく、やうくこしてきた、いけんしようとおもふてもいけんきかんといふ、これが一つのはじめ、すんだ道からすんだ心がかゞみやしき、すみきつたものくもりあつてはせかいうつらうまい、すこしでもくもりあつては世界は丸くもり、まあくくといふてき、すてた、日々に守護あればこそつくしただけの理がある、ならん中からこ、までといふ、もう一つ世界うつさうとおもへども、うらもおもてもくもりなきかゞみこしらへねばならん、いふ事も一つ、きく事も一つ、是がくもりのはしである、是から又一つ事情、是れから一つの事情、一二三といふたる、是から二といふにつこりしようとはあと日をおうとたつた一つのくも

り、さあはらしてくれにやならん、臺になつてはらしたらみなはれる、身のさわりといふ、よう聞わけ、是よりてがらさすでく、さあくしつかり定めるなら一時にはれる、それせかいすつきりはれる、たつた一つの聞わけといふ、心にやめように行かうと、たつた一つの心、さあ聞わけく、聞わけにやならんで、さあく、かはるくく、おほくの中、世界の中、信者くといふて日々つれてかへる、あらためる心のみがき、にごりことばはなけれど、心にごりありてはどうもならん、とほるにとほれん、あちらへでこす、こちらへでこす中にしんじつ信者にきこへたらどうするぞ、おれがくといふてたてすまさにやならん、みんな中に上からすませ、それからすませばみなはれる、上からにければはたくもりまつくらがり、わかき中

内々の處何度くゝのわびこと、つみにおとさうとおもふ、何度くゝすませくゝ、はじめかけたはなにもつてはじめかけた、四方正面の理をもつてすましかけた、よく聞わけてくれ、どれがわるい、これがわるいはかずくゝの中いへん、とほりただけは心にある、てがらさすでくゝ、くもりあらひきる臺ともいふ、てがらさすでくゝ、さあくゝ高い處ににぎり、一寸にはかぞへられん、何とも一寸にはあらはれん、もう一寸手がたればおれもみがかうとおもへども、高い處は手がとゞかん、よう聞わけたらなんにもふそくはない、たれもくゝあらためたら出世くゝそれくゝの心もあらためるやろ、是ではなあと道をきつたるものもある、十分の道具めかへくゝ、さあくゝ一寸にみえんくゝさあくゝ手がらくゝ、手がらさすでくゝ、さあくゝあすの日か

らはなしにかゝり、どうなるもおもふ處、日々てらしてくれ、どうでもかうでも道心の理にくもりありてはどうもならん、行くも一つ、かへるも一つ、みずみずの理といふは、どうもをさめるにをさめられんでるもかへるもみんなといふ理は、是までたのしましたかひもないわい、ウワ……。

△おして御願

さあくゝ身の内のさわり、いたみなやみは神のてびきともさとしたる、さあくゝたのしめくゝ、心の理は受取りである、かうといふたら、かうといふ理はみさだめてあるから、第一の道具一名からかうといへばどうでもかうでもとめてみせる、臺になれなれ、幾名何名の中でもおもふやふにいかん、よう聞わけ、それくゝだんじあふてくれ、これまで何時どうなるともどうい

ふ心になるともわからなんだ、親様のかげ神様のかげや、どうなりてもかまはん、ついの一つの事情、長いともみぢかいともいはん、なげきのことばも聞たであらう、年がわかいいもの、又候くといふて何にもきざしもなく、心になきものまでみなわづらはした、そのたつた一つの理みなあらためさすから、おれは何もした事はないといふものもあらう、是だけさとしたら十分のさとしてあるほどに。

△明治二十八年三月二十九日

さあ〜尋る事情く、さあ〜理によつて事情の理、一にもつて尋る、まだ〜一つの理がわからん、どうしてもかうしてもはじめといふ、さとしかけた理、此道がわからん、ほん元しらん、一時にわからん、理だん〜にわかつてくる、道といふ

わからんものにいふたてわからんなれど、日がでてくるどういふもかういふもをさまる、日がでてくるからみなしんはいはいらん、みな守護さあといふたらでるでさあといふたらなるで。

△明治二十八年四月四日辻豊三郎氏と留菊と縁談の

儀御願

さあ〜尋る事情く、ゑんだん一條尋る、つないだ日むすんだ一日の日を生涯の理にをさめるなら十分なれど、中にどんな事情神にたづねてしたなれど、こんな事いふやうな事ありてはならん、そこでめんく、それ〜かうといふ理さへむすべば一つはこんでみるがよからう。

△明治二十八年四月十一日足達保太郎四畝貳步宅地

(御本席様東の地所) 買入御許の願

さあ〜尋る處〜、時をもつて〜、なる時あればならん時もある、時もつて事情はこんでくれるやう、さあ〜ゆるしおかう〜。

△明治二十八年四月十七日御本席様御目の障り御伺

さあ〜まあ一寸尋ねる處〜、さしづといふはいくへさしづおよんで、實々くどきさとしたるなれど、とんと心えん事情である、もうすつきりなあ、みな一つ事情おもふ處、これき、わけにやわからん、もうすみやか、けふは身の内すこしよいといふ、又わるいといふ處からつとめさしたる、日々事情どれだけかさなる、一時みればはかりがたない、ようき、わけ、ついに〜はなしさとしたい、どれだけさとしたかてほんのつかみさがしたるやうなもの、日々はこんでる中にほんにあんしんして

る處あらうまい、ようき、わけにやならん、人間心のをさまりどころといふ、どれだけのの中に不自由かんなうれしいといふ、ついにわかるもの、年一つかぞへてみるがよい、年限長ささとしある、年限き、わけ、一日もやすんだる日ない〜、たのしみの中にとんと一つの理にうつとしい、うつとしいからき、わけにやならまい、ようき、わけにやならん、ほつておけばいつまでも一人をらん〜といふ、日々の日をおくれたる、一日の日はこびがたない、よう聞わけ、身の内と道と理と日々はこぶ理と三つさとしたる、それ〜みな心の理失ふてある、そこでわからん、その處とんとはこんでくれにやならうまい。

△押て政甚氏かまさへか御伺

さあ〜みな尋る處〜、をさまありてをさまりない、どうも

ならうまい、たれがどう心をさまらんから萬事治まらん、みなねをあらひくすみやかならん處から事情どうもならん治まらん、ねからすつきりあらひたいもふの處からせいとはいはんひとりから治まりたる處ようき、わけ、わけもわからん處から此道元々やぶれ道、ほそき道わすれて、今なりたる道ばかりみるからわからん、元々ねからあらうてすつきりといふ。

△教長様御身上の御伺

さあく尋る處く、どうもこれ身上といふ、身上けふすみやかありて一時心えん處、萬事の處き、わけ、まあ身の處がふそくなる、まああかい處く、日々あかいなれど、心の道事情これどうもならん、なぜどうもならんといふは、一つのものもつて一つ、二つもつて一つ、三つもつて三つ、むつかしいさと

し、ようき、わけ、一時の治まりといふは、いづれといふはどうもならんく、ようき、わけ、一時の治まりといふは、いづれといふはどうもならんく、ようき、わけ、物にたとへてさとそ、そんじてしもたらどうもならん、はやく修理か、らにやならん、年々修理く、はそんなるはそんなりきりたら修覆にか、らん、これ一寸き、わけてくれ。

△明治二十八年四月十九日内務省より鳴物の内三味

線入れるのをやかましくいふ依て三味線にまかへ

たやうのものに御許の願

さあく尋る處くさあくくどういふ事こふいふ事一時わかるまで心がすまねばゆるすといふりもならんといふりも日々であるどんな事もでもあろみるでもある心にもつて。

△明治二十八年四月二十七日教長様御身上御障り中
に御守り差支ゆゑ御本席様へ御願ひ申事御伺

さあ〜尋る事情〜、一時もつてどういふ、あざやかなる理なる、日々とほく所一度二度の理、一つ理により代り、かはり事情は席に萬事まかせある、さういふてくれ、萬事すつきりまかせてあるによつて。

△明治二十八年四月廿九日事情願の前に御差圖あり

さあ〜尋ねる、席々これまで事情にて、もう日々の處つかへ〜て、一日の日事情はこび〜、そこで一日なりと〜事情はこぼしてある、席がどうもならん事は一寸はない、事情によつてどうもならん、たぶん〜の事情つかへてゐる、一日一席となつてゐる、これが日々はこびこしてある、はこばにやなら

ん心にとつて事情やすましてくれ、そこでどういふものである、もどるやいなや一日もなあ、一日の日も休まずしてたいくつ〜、十分のたいくつ、ようがふえてある、みな刻限もつてはたらかさにやならん、もうほどなうもどつてくる。

△明治二十八年五月十日午後教長様昨夜南海より歸

部御身上速かならぬ事情御願

さあ〜一時をもつて尋る處〜、身のさはりはいかなる事とみなおもふ處、一時もつてさわりやあらうまい、前々事情一つならん處、どうなりかうなりをさめきたる處、中にかわり身いたへられん處、何でもかでも尋切て〜、身に事情あればほつておく事できん、一人かゝる處、今に今の理ではあらうまい、みぢかいあひだといへば長い間もある、めん〜事情尋かける

かいは、さしづに及ぼふ、身にたへられん事情よりあらため、あちらちよいく、こちらちよいくの事情、論してある處、ほんになるほどとあつめてくれ、ほつておけばおける事もあ、なれど身上に事情あれば、ほつておくこと出来ようまい、ならん事情存命の事情なら、一人おやとみて、ほんにたよりをさめたる事情、又一つだけかはりて事情といへば、さしづ一條ではこびきたる、是迄なんぼもいくへのさしづもしてある中に、そのまゝの事情もある、よう聞分、人間心の理と、又みんな双方たのもしい理とき、わけてくれ、一人にかゝれば一人にかゝりてある、日々身上に事情あれば、つとめられようまい、一人の心の理といふ、人間の理といふはようき、わけ、おほくの中にどんな理もある、そのまゝにしておける理と、おけん理

とある、みんなそれく、そもそも理ではをさまらん、人間一人の理さつしてくれ、人間の心をもつてかうといふ理は、いへば成程の事情もある、なれどながく、此まゝほつておけばどんな事情になるもわからん、一時もつて心のをさまる理さとさにやならん、あんしんさゝにやならん、さきはほつておかんといふても、一時の心なくば、どんなたんのうさしてもをさまろまい、おひのべくの理は、今迄はゆるしおいたる、なれどころつと一時なるほどの理ををさめにやならん、きをやすめさせくといふ理は、是迄いくへにもきかしてある、今迄さしづの理をはづしたのやない、はづさしたのや、是一つよう聞分てくれにやならん。

△押て安心は本席様

さあ〜みな尋かけたら、一つ〜わかるやろ、もうこれといへば、かうをさめかけても、どうでもをさまらん、いづれ治まるといふて、今迄すて、おいたる、どうでも治めてくれ、よるよらんもどるもどらん、もどつたかとおもへば又でる〜、をさめかた一つでをさまる、かうしてかういふ事になれば、さき〜をさまらん、さきうすいといふ、先の理ある、先の事情があるで、はやくとりかへてくれにやならん。

△又押て

さあ〜みなだんじあふてくれ〜、一人もかくしつゝみはいらん、みんなそれぞれ、事情もつてはなしかけたら、かうなつたといふ身上にせつなみみてゐられん、日々のくもりなやみは

中々大へん長い間である、入こんだだん〜さとす理から聞分け、かうといふても、又そうやないかといふ事情をもつてをさめにやならん。

△明治二十八年五月十二日政甚氏東の方へ治まりて

本席様跡をつぐ事情運ぶ件御願

さあ〜だん〜事情もつて事情尋る處、さあ〜よう聞分にやわかりがたない、ものといふものは、しゆんがある、道理さとせばみなしゆんがある、しゆんがはずれると、種をおろしてもはへるものもあればはへんものもある、しゆんがはずればおぼつかないもの、どんなものもしゆんがはずれると、一花だけでおちてしもたらどうもならん、これから一つの理をき、わけ、一時一つわからんようになつたらどうもならん、一つたい

せつ／＼心の理をしづめてきけばこれまでの理にあざやかかわかる、身の内せつなみやむも心一つ、なんぎするも心一つ、ようきけばさうさう一つをさまる、此事情き、わけばわかる事のおつまる理、年限たつてどうもならん、年限たつた中によるこぶばかりならよい、くどきはすつきりならんで、年限たつてから、こふをつんだてどうもならん、ある内、みる内、たのしみ尋ねる理なら、一つ受取、又一つもちひる、身上ありてたのしみ、身上ありて道であるこれ一つ、き、わけくれにやならん、みのせつなみありてからあらためてにやどんな事でもあらためられる。

△西の方古き建物永尾よしゑの住居とする願

さあ／＼尋る處／＼、協議としてをさまる、理をあつめたらよ

き事とをもへばはやくはこんでくれ、中にしんのあらためる、どうせいとはいはん、身の内かりもの事情さとしたる、あと／＼めん／＼のものはないもの、世界名がありてしようなきものあるまい、これ一つかんがへてくれればわかる、ようき、わけてくれるやう。

△梶本まさへ一軒建る願

さあ／＼だん／＼事情、尋る處／＼、治まりしだい／＼、實を尋ねて治まりしだいしだい、治まる事情、何時でも／＼。

△政甚氏東京より郡山へ連歸りある處本部へ連れ歸

る願

さあ／＼、これ／＼尋ねる處、これも一つはなしせにやわからん、何度も／＼心定めずして、あちらこちらさわがす處、わか

らんは世上理である、又一つ大きやうなものでもしゆんをみればちいさいやうなもの、人間の事情もつて、すつきりきりはらうたく、なれど神がつないである、ひとまづ人間心できりはらうた、世上の理からさらにやならん、又にんのためである、一時もつて尋る處、つれかへれ、なんであつたやらうといふやうになる、つれかへれ。

△梶本氏まさへの中調和の事情

さあ、尋る處、よからうとおもふ理がわるい、これはどうである、人の心はわからんたによからう、どういふものあれだけの事はなんである、一つ理を、一つでわからん、あちらの理も、こちらの理も、二つ一つの理をよせて、なんでもかでも理をよせて、それよりあつめるがよからう、すみやか治めか

けるがよからう。

△押て願

さあ、尋る處、どうもこれ一つようて一つわるい、これどちらもき、わけてくれ、なかよく治まる理、どちらの理もき、わけてやれ、日々みにくい、事情、とんと日々の心が治まりがたない、これであつたか、一時の處、はやく治めてくれるやう。

△梶本氏籍を本部内へ引取の件御願

さあ、尋る處、これはどうでもかうでも、かうといふたら治めてやらにやならん、これさとして治めりや、治まるやうな心を治めにや、治まらせんで、此屋敷鏡屋敷、くもりありてはかみやしきとはいへん、いふ事する事ちがふたら治ま

らせんで、これだけさとしおく、ゑんりようはいらんで、ゑんりよするから治まらん、神のさしづをうけて、ゑんりよしてゐてはさしづいらんもの、あとへもどるほうがおほい、何もならんやうになる、ゑんりよするから事がおくれってくるのやで。

△明治二十八年五月十三日午後三時教長様御身上願

さあ〜尋ねる處〜、身上〜、これさあ〜たへられん〜、一時たへられん處を尋る、双方の理であるで〜、双方の理といふは、ぜん〜さしづどういふものと、それ一寸にはわくであらう、しゆんといふ一つの理をさとしたる處から、萬事世界にも一つ理がありて、今一時にかゝるとはおもはず〜一寸の事情ではない、あんじる理もある、身上に一つどういふものと尋るも同じ事、はやく萬事の處、どれからながめてもほ

んにさうやなあと、あきらかみちをはこんでくれ、かうといへばそんならどうならうと、又おもうやらう、身の内さわる、今一時の事情やない、中々長い〜事情である、前々事情ありて又とほく處で事情ありてもどる道筋の處よりようしやんせよ、是聞わけてくれねばならん、一人ではあらうまい、一つの事情、一時世界の處も、成程といふ事情重々さあ〜早く〜、一つ事情。

△押て院長でも招く事で御座りますか

さあ〜ぜん〜事情はこんだる處、一時つたへて早くはこんでくれ、かうすればどうなるとおもふやろ、おもたてならん、しつかり一つ〜。

△押て

さあ〜事情尋ねる、身上どうである、あんじる處の理を尋る
 〳、あんぜる處の理は、一寸にさとしにくい、よう聞分、一
 段治まつたら治まるである、是一つさとしおくによつて。

△又押て醫者の事情

さあ〜尋る處、さあ〜よう聞分、世上にはみな是なんとい
 ふ〳、是第一の道、今の一時やあらうまい、ぜん〳よりさ
 としたる、さあ〜早く〳、事情はこんでくれ〳。

△引續て御さとし

さあ〜よう聞分ておかにやならん、一時なるとはおもふや
 ない、是聞分たらつよいはなし聞分なんだら、どうもならん、
 よはいはなし、是よう聞分。さあ〜幾度しやんしたとて、か

ういふ時はしやんつかん、又いへるものでもなし、それより一
 時も早く、順序世界明らかといふ事情をはこんでくれ。内々も
 よう聞分け〳、よう定めてくれ〳、定めるといふはどんな
 道、神といふいふ、定めるならよう聞分、なるも神、ならんも
 神、ならん神ならいらんといふやろ、さあ〜萬事神一條の道
 といふ理ををさめてくれ、是一つ聞わけにやならん。

△明治二十八年五月十三日夜九時半教長様御身上大

變せまりしに付御願

さあ〜もうよい〳、いはんかてわかりである、今夜の事は
 わかるまい、いかなる事も神一條の道、神一條の理をたてると
 いふ事は、ぜん〳としたる、けふになる、けふになるとは
 さら〳おもふやないで、一時の處、身上せまればどうもなら

ん、何がちがふ、かゞちがふとはおもふまで、是迄だんく、
ぜんくよりもくどうくさとしたる、今夜になりて、どんな
事も、おもひだしてくれく。

△押て願

さあくあつてはならんく、あつてはきのどくや、みなさと
したる、一時をもつてどういふ事とおもふ、よう事情を聞取て
さとつてくれく、一時の處事情は一寸、一つの理はかりがた
ないく、是から心得のためさとすから、ふるいものこんな事
ではくと、おもふてとほりてきた、たつたらあんなくやう
なもの、一時一つのしやん、しやんといふては此上のしやんは
あらうまい、一時どうならうといふやうになれば、どうもなら
うまい、はやくくと事情、是迄なんべんさとしたやらこれし

れん、よう聞取れ、一時の處どうならうとおもふ、双方の心に
取て、みなく高いひくいの理はない、ろつくなみちなれど、
かつての理より、だんく高ひくの理をこしらへ、あちらへこ
ちらへすれ心の理はさんらん、たつた一つの理を兄弟一つの
理、あとよりでけた理もあるまい、さきへでけたといふ理はな
い、どうならうといふやうになりてからは、どうもならん、み
なうちすてたる事情もある、よう聞分つゞくだけはつゞかす、
つゞかんやうになれば、つゞく理をこしらへておくから、何も
あんじる事はいらん。

△しばらくして

みちをあんぜるやないで、みちと一つの理とは、ころりとまち
がふ、これだけきかしたら、たしかにく。

△明治二十八年五月十八日午後六時教長様御身上今

一段速かならぬに付御願

さあ〜だん〜事情尋る〜、もうたいていの事情は、それ〜みんな聞いてもあれば、しりてもゐるやろ、みなしりてゐる、どういふものでみにせまりきる〜、これで大丈夫とおもふ、なれどまだ身上せまる、もう一だんいかなる事と尋る、ぜんぜん事情もつてさとしたる處、なるも神ならぬも神とさしづしたる、これからようき、わけ、どうでもかうでも、たすけにやならん、どうでもたすからにやならんが理、中に日々こゝろやむ處よりき、わけ、神はすてるといふ理はない、たすけたいが一つの理、すてる理はなけれども、ようき、わけ、日々みんなのこらずかはい理、日々かはいならこそわけへだてないのが

一つの理である〜、まあ〜たいせつないからだといへば、もう一人とりかやしのならん理である、一つの理がどうもわからん、もうよいかとおもへば、また事情、一時の處はどうもあらうまい、なれどようき、わけ、みの内さわり、どうなつてもかうなつても一つの理、きつてもきれようまい、はなすにおよばうまい、この身上不足なる、事情ようき、わけ、もうどうなるかしらんといふやうなもの、一時の處でこして、遠く處より道中ながらの事情あざやか、内へをさまり、一夜あくれば、自由用ならんといふ處をき、わけ、一寸にはいかん、あなじるといへばあなじる、あなじなきといへばあなじなき、しきつた事は、どうも一時の理にのべにくい、このばにたちならんだものは、みなこゝろの理は一つであらう、ほつておかせんで〜。

△押て願

さあ〜これまでの處、運ぶ〜處、もうながいあひだであつて、どうもみにくて〜ならん、一つの理によつて、そも〜の理、どうもなあ〜、これまでにはこびはこんだみちがなあと、おもひおもはした處、かうなつてからは、おそいわやいやい、ワ……、ならんさきにとこれまでにだん〜きかしたる、ならんわやい〜、にち〜さびた理のさびは、みがくにみがけようまい、おくれた事情はいそいだ處が、さだかならんものや、かなはんものや〜。

△おして

さあ〜尋ねかやす處〜、一日〜、はやく〜、一日もはやくかうしたならば、かうであらうかとおもふ處、理に理のせ

まりた處、いまだうしようかうしようとして、まゝのものなれども〜、なにほどの處、さすととも、一時の處いまの處ではみにこたへんといへば、あんぜんといへようまい、二三日の處、こゝろをあはせてくれよ〜、つないでくれよ〜。なにも道はあんぜるやないで、道といふ道はおほきい處も、すくない處もない、どんなあぶない處あつてもあんじる事いらん、みな〜せかいうちひ〜いたる處、こゝろにかけぬやう、一時の處なにもくどきはいらん〜。

△しばらくして

さあ〜はこぶだけははこぶが理である、ほつておくことはでけん、一つ〜はこんで、又一つはなし、みな〜こゝろ一つの理あはせてくれにやならん、みちをさまりたらさき〜みち

といふ、こゝろへといふ理が第一、目にかゝらにやしらんといふ理は、けす事はできん、身についた理であるから、けす事はできん、ようこれだけきいてくれ。

△明治二十八年五月十九日午後七時半分支教會長一

同歸部之上教長様御身上に付分支教會運方將來心

得事情願

さあ〜だん〜と事情はこび〜、又事情に事情、みなそれ〜遠く處心事情をもつて、一日の日に尋出る處、ようみな一つの事情から、心といふ理をもつてくれにやわからん、もうおだやかいけば、おだやか心で、心をわかさんやうよふ聞分、みなせつという理がある、どういふせつもある、せつ聞てだん〜、事情できたらせつだけやない、しんの事情になる、しん

の事情になりたら取りかやすに取りかやされん事になる、みな兄弟つれもどりたからよふ聞てくれ、長らくの道の事なら、どんな日もある、よき日ばかりならよいなれどさう〜はいこま、よう聞分け、つゝしみの心がもとである、明らかといふはつゝしみの心、一とまづはこはきおそろしいといふ日もありた、實は天の理、天の理はまこと一つの理といふ、一度二度三度は、みゆるしてある、かはい一條からゆるしたる、なれど心の理よりおこる事はみなかなはん、此の道といふ、元はほそい道、處にどうといふものもなし、今の處やう〜、處々道ひらけたる、是一つだとして廣めば、だん〜道といふ、是れ迄の處、おひはらわれ取はられ、どんな事情もありたやらう、なれど今日といふ、みなそれ〜理のをさまりたるは、しんじつ

だといふ、よう聞分、是迄かんなのみちをとほしたる、どんな日もあつたやろ、なんでもといふは、せかい國々それぞれおほく道がついて、一つ／＼兄弟のもとをこしらへかけたる、兄弟といふ理を聞分、人間といふ元々一つの理より始めたる、兄弟なら兄弟といふ、いみがなくばならん、なれど中々兄弟心があはんものもある、みなそれ／＼心より合せてくれ、聞いたるものより合せてやれ、そこで聞たる理、神の自由用といふ、日々うたがひすつきりはれてこそ理といふ、身の内かりもの理は、日々といてゐる、日々とかしてある、日々世界理をだす、元わからんからみなよせたる、夫々心の理を合すならどんな事もかなはんとはいはん、兄弟といふは、今一時さとする理が兄弟の理、なるも神、ならんも神といふ理は、かうといふせい

しんを定めるなら、受取らんとはいはん、受取にやならん、受取ればあんしん、みなあらためて定めてくれ、今の一時どうなろうといふやうにならねば、あとの理がわからん、あとの理がわからねばさきの理がわかりさうな事がない、よつくあと／＼しやんして、みな兄弟さとしあふて、定めてくれるがよい。

△おして

さあ／＼尋る處／＼、どんな事情もさとしてくれにやならん、うつとしいやうな日でも、又てることもある、かげばかりやない、是一寸さとしておかう。

△前川氏御居宅新築願

さあ／＼尋る處／＼、それは順序といふである、さあ／＼ぼつ／＼、一つ／＼理をはこぶ、是一ついのふておく、あちらもか

たぶかん、こちらもかたぶかん、かたぶいてはみにもたりやせん、是だけさとしおかう。

二二四

△政甚氏東の方へ御納りの事情

さあ〜是迄の處〜、いくへのしやんもつかず、こゝろもさだまらず、日々席つとめ、一つの心といふは、よる〜の理にはおもひだし、心をやまして、どうもできかねたる日もありた、日々おくれ〜て、とんともうわかるかと、おもひ〜とほりた、しゆん〜といふ、しゆんにをさまれば、まつ代とさとしおかう、神一條ににぎりくもりさらにない〜、なれどさようつたへやうによりてくもるがはじまる、くもりては神の道とはいはん、よう聞わけてくれ、道といふはどれからをしへにきたのやあるまいし、元々始めかけ、事情より聞分てくれ、神

一條の理はまつすぐなもの、まつすぐなればこそ、けふの道といふ、一つをさまればまつ代の事情、是聞分、わからんからわからんやうになるもの、もう一つわからんんだら、すつきりわからんやうになる、取かやしのならんやうになる、是聞分てくれるやう。

△明治二十八年五月二十二日前川氏副會長撰定の願

さあ〜尋る處〜、まあ〜どんな談し、どんな事情、日々それ〜心にかゝり、心づかいやう〜わかりはなしあふ處、尋ねた一條ちやんとみなもどらんといふ、精神を定めて尋ねたら、かういふさとしは初めてする、會議〜といふてはたらいても〜、用ひてもらはねばはたらしきぞんのやうなもの、世界の道はじつをはたらくであざやか、鏡やしきの理もたつ、是迄

二二五

の處は何をしたんやらといふやうになれば、理のもて行き處はない、かういふはなしは初めて聞たである、これより初めかけた理にもとづき、今迄の人間の心をもつてするから、神の理がかける、うすふなりてからはどうもならん、こんな事情はじめやで、初めかけたらをさめにやならん、まあく一つこれもかうせにやなるまいかとおもふやない、みなさしづする、是迄人間の心をもつてするから、もつれくてもちもさげもならんやうになる、これから初めかける、筆にとめく、筆にとめたら其の理に定めにやならん、夜もねられんほど會議をしても、もちひねばどうもならん、もつれくの理はどうもうけとれん、うけとれんからこまる、日があるとりかやす事でけんやうになりたらどうもならん、まだくだんないくと人間のぎりをも

つからどうもならん、是れまでせき定め、だんくはなし傳へたる、何程つとめても理がをさまらねば受取られん、ふしようくの理は受取れん、ようき、わけ、此のもの一人ほつておけん、いなひ柱ひかへ柱といへば、皆一時もつて、かうせにやならんとおもふ處、今一時に聞てさとしする事は、一寸にできん、又々しゆんをみてはなし、しゆんがきたならこくげんといふ、こくげんは、しゆんをはずさんためのこくげん、こくげんのはなし、みな傳へて筆にとめてある、なれどみなはずしくてきた、筆にしるしあつても、これは一寸かうしておかうといふやうではどうもならん、ならんからかういふことになる、刻限もつてのはなし、差圖もちひねば尋はいらんもの、今迄の處すぎたるはなし、取かやしはならん、なんでもかでも助けにや

ならん、助からにやならん、なれど助からんといふはどういふもの、ようき、わけ、これまで長い道中といふ、どうしようしらんといふやふな日もありた、指圖これならちがふまいと、是迄の刻限しらば、なるほどかうといふ理もわかるやろ、これわからねばならん、これからはなしする、よう聞分、みんなそれ、みなもちの事情、あらためて一時をもつてか、れども、いひにくい、なれどいらんともいひにくい、刻限をもつてさとう、刻限何時ともわからん、筆にとめた理より、たよりにさへすれば、何もいふ事はない、なれど刻限のさしづ、ぐる、まいておいてしまい、紙のいろのかはるほど、ほつておいてはどうもならん、そこでこれまでも、ゑんりよきがねはいらんとつたへたる、ゑんりよきがねは理のあつまらん

種である、よるついやした處がなんにもならん、これよう聞ておけ。

△おして

第一 只今の御さとしによれば跡々談じの點も刻限で御しらし被下候哉

さあ、まあ、尋處、わからにや尋ねにやならん、わかるまで尋にやならん、ぜんに尋ねだした理は、いそいでいそが、刻限にしらすといふ、跡々の理はかうといふ事情なら、續てさとすによつて、おもはく通り、尋ねるがよい。

第二 本部會計一手の事情

さあ、それは、よくの理をあつめてくれた、それは十分まつてあたい、おくれであるから、かういふ事にな

つたのやわい／＼、それはようあつめてくれた／＼、さあ／＼ゆるさう／＼。

第三 御本席様の宅を政甚氏の名前に切換る願

さあ／＼尋處／＼、一屋敷／＼、幾への棟かず、一屋敷／＼、いくへのむねかず／＼どうしたさかいに、たれのものといふやない、なれど世上世界の理もある、又人間には、一名一人の理のあるもの、それからき、わけ、一時尋處、どうせいかうせいとはいはん、どちらへしたところがおなじ事、中にそれ／＼、あふあはんといふ理はどんならん、かうといふは理である、せきといふ萬事の處、きかせおいて、事情一寸しばらくの處、とびらをひらいてのはたらき、一代ではあらうまい、あと／＼つゞいて又代といふ、あと／＼代それなくばならうまい、一時一

つどうといふ、かたき理をさとするには、かうならかう、けふの日は子供に一つの事情、一寸一日、二日三日がはやい、をさまつたら、はやくするがよい。

△つづいておさとし

もうこれほどなうのしゆんの日がきたるから、はやくみわけきゝわけ、かうといへば理をはこんでくれ／＼、一年の間どんなくらうを、みせたやらわからせん。

第四 梶本氏、まさへの事情願

さあ／＼さしづ／＼、ぜん／＼のか、り一つ、縁談みなさとしたる、たれ／＼とのゑんはない、あちらつたへこちらつたへ、やれうれしいと理があへば、十分のゑんとしらしてある／＼、それが生涯のゑんといふ、一時尋る處、將來の理にをさまらね

ばをさまらうまい、此屋敷十分とおもふた中に、どういふものとおもふやろ、むりといふ理はをさまらんといふ、一つはなしの理になるやろ、神様のさしづならばといふても、あとく事情こしらへばとめるにもとめられん、かういふ事になれば、ほどいてしまふてやれ、あ、いふふうになりても、あとくはしんせつやい、なるほどといふ、夫婦の中きれたといふ、夫婦のゑんはなくとも、互に兄弟といふ、ゑんはむすんでくれ、鏡屋敷、これまで夫婦の中つみのたへもなき日をくりた、なれど十分ならばかうがよからうとさとしたる、なれどよからうとおもふた理がわるくなる、ふしようくの理はをさまらん、すつきりするがよいく、地場ならこそなあといふ、しんせつやい、互くこれが第一である、かうといへば、さうするがよからう。

第五 奈良系様の事情

さあくこれもく、うもれたるく、うもれたるも、うもれたのや、かういふみちであると、二度三度も、はこんでくれるがよいで。

第六 山中忠七氏御居宅の事情

さあく尋ねる處く、もうこれさきくの日は、わかりである、しれてある、そこできいな處、きらくな處、こしらへてやつてくれ、ぜんくのかり、かりの道といふ、これたべたいといへば、たべさし、のみたいといへばのまさし、ねることできるやよい、日々の日、たいてきらくにしてやつてくれるがよい。

△明治二十八年五月二十六日（舊五月三日）裏筋道

路開き壁をすること願

さあ〜長らへて事情、それ〜順序一つの理、心おきなうを
さまれば何時なりと〜。

△明治二十八年五月二十六日（舊五月三日）御本席

様地所東足達保次郎所有の地所買入に付川筋へ石

垣する事御許の願

さあ〜尋る事情、おひ〜ぼつ〜かゝるがよい、ゆるしお
かう〜。

△明治二十八年五月二十八日（舊五月五日）朝教長

様御身上の願

さあ〜尋る處〜、さあ〜どうもこれ一つしやんわからう

まい〜、身上に一時これどうならうしらんといふた處、いく
へ〜の理はさとしたる、みなそれ〜だんじの理ををさめ
て事情はこべば、成程といへば、身上はらく〜なれど、一つ
〜の理をおもひ、たれと〜のしやんはあらうまい、二人事
情のしやん、われもおもひおれもおもひ、さき〜は何もいふ
やない、おもふやない、らく〜の心を一時定めにならん、
此理をさとしおかう。

△明治二十八年五月二十八日永尾せつ身上より辰枝

身上にかゝり兩人速かなれば又々芳枝身上にかゝ

りしに付御願

さあ〜尋る處〜、まあ〜身の内さへすみやかなればたづ
ねる事あらうまい、身の内せまるから尋る、尋る時の心といふ

はいつく生涯さだめるといふなれど、すみやかなれば事情日がたち、月がたちついでわすれる、一度や二度はみなゆるしたるなれど、なんぎささう不自由ささうといふ理はおやくの心にはないなれど、なんぎするはかはい一條から、かはいといふ理から身上になやみかける、よう聞分、なれどだんく天の理にせまれば、どうもならんやうになる、一時さだめたといふたら、何年たつてもかはらんのが生涯といふ、人がしらんとおもふてもしやんはつくやらう、さあくよう聞分、さあくさんげく。

△明治二十八年五月三十一日夜十時頃教長様腦のし

ん痛むに付身上願

さあく事情尋るく處、さあく事情尋る、心といふはよぎ

なく心であらうく、身の處せつなみ一つ事情けふはどうであらう、又あすどうであらう、日々おもふ處く、又一時どう、日々であらうく、やうく一つ理それ處にてはみなとりきまりだんじ一つ、ほんにさうやなけにやならうまい、一つでならうまい、一つさとすによつてようき、わけをさめてくれ、身上せつなみいつくまでにはなるまい、是れまでちやんとすんである、身の内せつなみなけにやたのしみさとすく神一條實ととりて治めてみよ、またしてもくらうは心でくらうしてゐたのや、たのしみ心あらためたらくらうあらうまい、陽氣あすびといふたる、陽氣あすびといふは心でおもたりしてゐたぶにや、陽氣あすびとはいへまい、これから心にくやしきありては陽氣ぐらしどころやない、はやくにこれだけわかつたこつちや、わ

かつたら日々のんだりきたり、いつくまでたのしみこれ一つ
き、わけ、一時はやくさとしてくれにやならんで。

△明治二十八年六月八日（舊五月十六日）豊田村よ

り三島村道路二間道路に取廣め御願

さあ〜尋ねる事情〜、さあこれまではかりがたない理であ
る、刻限〜日柄しゆん〜の理といふ、どうならどうと事情
理にならてくる、なつてくるがぜん〜一つの理とはなしの理
あふかあはんかどんな理も世界どうでもなつてくるほどに、一
時もつて一つの理、もう一段といふ、かゝる處何時にてもかゝ
るがよからう、ゆるしおかう〜。

△明治二十八年六月九日御本席様西宅のかまや立替
の願

さあ〜尋る處、こゝぐはいがわるい〜とおもふ處、してや
るがよい〜、ゆるしおかう〜。

△明治二十八年六月九日山中忠七氏三間二間半立家
の願

さあ〜尋る處〜、一寸かりやとうぶんの處、いそいでして
やるがよい。

△明治二十八年六月九日普請小屋及材木小屋東隣り

地持行願

さあ〜尋る處〜、さあどこなりととうぶんの處、あちらへ
やり、こちらへやるのがしごとや、何にもかまわん日々のしご
とゆるすで〜。

△明治二十八年六月九日（舊五月十七日）御本席様
御身上の御願

さあ〜尋ねる處〜、さあ尋ねば一つ事情もさとしおかう、
日々の事である、朝はどうなりかうなり、夜あけたらつとある
〜、どうもなあ事情によつてつとまらん、又つとまらんおも
ふ中に、事情日々につてある、心にかゝりて事情一つさとし
おかう、なにほど日々になすれられん、夜さへあけたら一時間
二時間あらう、一度千度にむかふやうはたらかしてある、一日
の日ゆつくりたのしみ、萬事のものにあたへてある、日々はた
らき事情さして一度どこへ行きてゆつくり、どこへかうしてた
つ日、よぎなくつとめにやならん、長い間道すがら今にみれば
蝶や花やとみえる心の理、一寸かゝりもうなんでもかでもそだ

てにやならん、あちらではぼしや〜一寸の道のふみとまり、
夜もねずにはこんでふりかはつてはならん、たのしみ事情もさ
とさにやならん、じつと三百六十日、五十日一寸いさゝか、一
時間二時間、一寸やすめんとおもふ、つめとほく處へでるとも
心に理がわすれられん、これをきゝわけてくれ。

△押て御願

さあ〜又事情尋ねかやす處、身にさわりどうであらう、かう
いふ事で日々おもふ、尋ねばさとしどうり一日の日もゆつくり
とどうでござらう、これ一つさとしたら、いかなる理もわかる
であらう。

△明治二十八年六月十九日午前御本席様御身上願

さあ〜日々の處〜、さあ〜まあ一日はよい〜、これ日

々たつ、なにかの事情、どうでもかうでもできにやならん、けふの日はよほどの事情なればこそ、つとめさしてある、夜分たへるにたへられん身上に事情ありてたへられんやない、心に事情ありてたへられん、むつかしいして行けばむつかしい、いきよぶんといふたらこれこそ、いきよぶんかをとをさめてやつてくれ、よる／＼のしやんたれに相談するまもなし、一日たち／＼はんきもたち、一人の心日々には十分とおもふてくらしてゐる中に、一つこゝろといふをさまらん、どうもなあといふ事情できてからどうもならん、此事情はやく聞分てやれ。

△おして御願、政甚氏縁談の事上御願

さあ／＼それはいふまでやない、尋るまでやない、おくれ／＼おくれた上もおくれた、さしづをもつてをさめるならをさまる

なれど、風にさそはれるよき風にさそはれん、風にさそはれたる理はたへられん、早く一つの道にをさまるなら一日の心のやすまる日があるなれど、とんとどうもならん、よき理にをさまらん、一つの道よき道にをさまらず、そんならさしづといふはいらんものやといふやらう、さしづにとりやう一つの理とりちがひ、それから聞分るならどんな理もわかる、尋てかうといふさしづをもつてかうといふ心をもつて、かうといふやさしづはいらんもの、是がたへられん、いらんさしづは幾度尋たとおなじ事、理と／＼わからねばすつきりわからん日がある、これ一つよう聞分てくれにやどうもならん。

△明治二十八年六月十九日陸軍恤兵部より軍資献納に

付明細書差出す義通知有之に付如何致候て宜敷哉

さあ〜尋る處〜、尋る事情〜といふは、それは一寸にはどつからとりたらよからう、どうしたらよいやらとおもふ、前もつてけんきん、たれ名まへにして、名前なくしてはだせず、教會は一つの元として、理をだした中には、かけでなあ〜、うたがひ心といふは、せかいでいろ〜こまかうして、一つの理をはこぶがよからう。

△押而本部より分支教會の區別をして差出候て宜敷哉

さあ〜世界うたがひ心からみれば、どつからどうした、たゞ一つの理にはこんでしまへば、うたがひなきにしもない、前以て一名の名前にして出してある、この道は慾もなしこ、ろからでたもの、そこでこれだけたれがどうしたいはずして一名にをさめたる、この事情も一つ、はなしせにやわかるまい。

△明治二十八年六月十九日教長様より部下の道の爲

熱心者へ金一千五百圓御下與に相成候に付ては如何致候て宜敷哉（本教長様御全快に付御よろこびとして御手元より一千五百圓を道のため盡して居るものへお下げ下さるに付本部よりも一千五百圓足して下げるもので御座りますか又教長様の分だけでよろしう御ざいますか）

さあ〜尋る處〜、まあ〜あら〜の心、あら〜の理がわかりてくれば、双方わかる、双方わかれば、又一つわかる、みんないかな理もどんな理もみなわかる、わかる〜ではそらわからん、どうして〜、かうして〜、じぶんの心だけ一つせかいの處事情にして、せかいの處みわけ、いかにはたしたも

のたぶんある、みわけみわけが、みわけにくい、おまいの方何人、その方何人、みわけにくい、あちらの方、こちらの方からきく、こちらの方はあちらからきく、そうしてみわけてやらにやならん、たゞいたゞいたら、ありがたい〜と、ただくほんの心だけにしてくれるがよい、どういふものもある、たすけにやならんものもある、そのときはそのこゝろをもつて、はこんでくれ。

△明治二十八年六月二十四日（舊閏五月三日）飯降

政甚氏と宮川小梅縁談の義双方内々運び致し御本

席様教長様本部員皆心運方致し結構と申されしに

依り御許被下候哉願

さあ〜尋る處〜、尋る事情はいふまでの事情である、まあ

一つかうといふ事情はこび、十分はこぶ事情、ゑんだん一つ、心と〜ゑんつなぐ事情、心と心つないたら生涯といふ、だん〜の道もつてはこぶ處うけとる、又さき〜うけとる、事情けふの日といふはきいておかにやならん、けふの日はくもりなく、理は十分理である、ことば一つかゝりてくれ、第一心一人心親といふ理おもふ、神といふ理おもふ、おもふはあざやか、おもふは神の理、親の理わすれる事なら道とはいはん、けふといふ〜理はまかせおくによつて、さあ〜まかせおかう、まかせおかう。

△押て其の通り運ばして貰ひますと願

さあ〜はこぶ一つの理、たゞ一つ理十分つたへて、さういふ事なら生涯さしづは生涯親の理、神の理、その理しらねばなら

ん、はこんでけふといふ、しゆんといふ理一時にはこんでくれるがよい。

△明治二十八年六月二十七日（舊閏五月五日）増野

正兵衛身上御願

さあ〜尋ねる處〜、身上にさわる、又さわるどういふ事、何がちがふてあらうとおもふ處、よう聞分てくれ、もう是だん〜事情がせわしい、それにまだせわしいすれば、ゆつくりの心はをさめられようまい、こちらにいれば又身の内せわしい、こちらすめばこちらといふ、日々には是れめにみゑん事にいそがしい、それにまだいそがしい、どんと一つさだめ、定めるといふ、はやく〜、是迄日々あちらもちよいと、又ちよいと、さあ是からしきりてみんな一つ〜の理をわける、中々の大やく

である、みんなみなほつておけばおける事もある、中々ゆつくりの事情もあれば中にはめへさへあけばせわしい、たいやくならばたいやくの心をさめてくれ、幾名幾名の事情なら、日々はせわしいてならん、そこで身の内はつかいどうしのようなもの、たがひ〜しあひもせんならんものや、用がかけたらせつかくの事情もハアといふ事もある、なるだけとほくへいでぬやう、それ〜やく〜あれば、心にうつしてくれ、身の處何もあんじる事はない。

△明治二十八年七月一日夜（舊閏五月九日）午後三

時教長様御身上腹痛上下し嚴敷に付御伺

さあ〜〜身上の處、願ふ處〜、一時一寸どういふ事とみな〜おもふ處、一寸よぎなき處である、ぜん〜もつてどう

なりかうなり、やうくの日をまちかねく、もう是で十分とおもふ處、又候心ゑんとおもふ處、どういふ事でなるやると、又一寸事情できる、一寸是迄とかわりてさとす處、おほいのちがひないやうたのむく、身上に一つ理と道の理とこれ一つ、まちがはんやうにたのむ、一度生涯の心をみたならば、身の内せつなみの理、心一つの理、身上是迄の事情おもひがけなくたのしんだかひがないといふやうではならん、身の内事情あればどうしようしらんとおもふ、まちがひはあらうまい、一時の處あんじるようなもの、身の内よりをさまりついてある、むつかしいなあといふたる日をおもへ、一寸あらためかへるやうなもの、たつべきものはたてにやならん、一人でもつとはおもふな、みなそれぞれの理でもつのや、おもてやらにやならん、世

界なみとはころつとまちがふ、みんなさうざうの理をもつてするからどうもならん、心の理があればこそ、あれこはやおそろしやといふたる處、一日も早くとたのしんだ日はみたやろ、是迄の理とかはらんやう、たつべきものは理であらう、めんく、それく、一日も早く、一年の壽命といふて定めたる處は、みな受取る理である、たつべきものはたてにやならん、なれどだんく、一つもつてのぼり、二つもつてのぼり、身の内かはりたる事情あれば、あんじる心の理さへかはらねば、あんじる事いらんといふさしづもしておかう、めんくもかはらんやうはたくもかはらんやう、これ第一である。

△本部より豊田村へ行道路三島村の分取廣入費の件
に付今一時かゝる者哉暫時村の成行を見て居方宜

敷候哉心得の願

二四二

さあ〜尋たる何も一つどういふ事も、どつからできる事と、なくてできてくる、一方は十分、一方は事情といふ、切にかうしようどうしようできようまい、内一つ屋敷中といへば是一つの理といふは、一時一戸といふは、一寸しばらくの處、みてゐるがよい、ほんになあといふ理がありてはどうもならん、一つの理もあら〜の事になつてきたら一つの理もそへてやらねばならん。

△明治二十八年七月二日増野氏の事情に付その御願

さあ〜尋る處〜、もう何もかも萬事の處、まあ事情によつて一時定めにやならんものもある、又のちのちにも定められるものもある、みんなおほぜいの中、うもれて〜うもれぐさに

なつてある、うもれてある事情わからねば人人ともいふ、をさめかけたらをさまる處までをさめる、おひこみ〜でのぼられん、のぼせんからのぼられん、ちよつとはつんてちよつとにのぼつてゐるものもある、實際あればつれて通るが神の道、とほりかけわからんさきから、こゝろ一つで通りてゐるものもある、わかつての事情、わからんさきの事情は、かしこきしやんやあろまい、これから一つしやんしてみよ、さあ一時の事情にもわかるまい、さうであるなといへば、ずるぶんわかる、はや〜たんして取極めにやならんものをしりて、かしこきといふ、はんたいからみれば、どうみえる、とゞかんものはあほうともいふ、とゞかんけれどもこゝろ一つじつをたのしんで通るが道のだいといふ、おもてある理も、一つの理も、もちひらね

二四三

ばならん、一つの事情を運ぶには、るんりよはいらんで、やくくの中にも、何人あれども、萬事ひきかまへての事情ならば、わけてやらにやならん、これもうもれてる、さあくはやくたんじて、わけてやらにやならん、たのみおくく。

△押而願

さあくうづもれく、男女はいはん、萬事一つの理もある、つきそう理もある、萬事よくき、わけにやならんでく。

△明治二十八年七月五日永尾小人せつ出物身上願

さあく尋る事情く、小人たる處どうもこれ一つ事情、一時かうといふ、又一時みるにみられんく、一つ身上に一つつみなきものにく理ある、何もつみなきもの身の内一つ一日事情みて、一つみな小人たる處、何もだんく事情、小人によつて

何もつみもあらうまい、あくもあらうまい、心ちがひもあらうまい、小人十五歳おやく事情、みな一つ事情ようき、わけ、くどうくのさしづなんどさしづ、月がたてば年がたてば忘れる、これではならうまい、おやく聞取てたすけにやならんたすからにやならん、小人心でたすけにやならうまい、小人どうであるまいなれど小人でたいそう、一時もはやくなんべんもさしづおよんだる處き、わけ、どんな事もさしづまげばどうもならんとさしづしておかう、かいしんおさめかたこれ第一き、わけ、一時はやくしやん、一時くなるほどといふところ、生涯にをさめるならなんべんたづねる事あらせん、くどいいたみなやみから定めにやならん、これ一つはやくき、わけてくれく。

△明治二十八年七月十日愛知支教會事情願榊井氏永

尾氏兩人治め方につき願

さあ〜尋る處〜、多くの中にはいろんな處もできる、一つをさまり、又一時をさめがたないといふ、めん〜もとんとをさまりつかんといふ、元といふ事情かうといふ處を尋る、どうしたらよからうといへば、どうもことはるよりしようないと精神をさだめて通らしてきた、ほこりの中に事情あつてどうしようしらんといふ、尋る處十分の話をつたへつたへて、それでもいかんといへばよぎなくの事情はこばにやならん、十分さとしてをさめにやならまい、これ一つさとしおかう。

△押して右兩人治め方出張願

さあ〜尋る處〜、さあ〜行くも一つ、行かんも一つ事情

といふ、十分の理を互にさとしてをさめにやならんで、こしても一つ事情、でこさいでも事情、是一つ聞わけてくれ。

△明治二十八年七月十二日教長様御全快に付本復御祝

第一 各分支教會長を本部へ招待するものでありま
すか

第二 かたもので送りたるものなるや

第三 日をのばしたものなるや

さあ〜尋る事情〜、さあ〜こ、までの日〜、又一つには、心にうかむよぎなくの理である、とほく處みな事情おもひ、一つの理をはこんだる、又一つよぎなくはこんである處、又一つにはいさ、かなりと自由用いさむ、是おもふ處、事情今の一時といふははかりがたない、できがたない、そこであたへ

で一つ、はこぶがよからう。

△本部内内御祝の事情

さあ〜まあ一寸、内々だけの事情ならあえてかまはん、とほくところはあたへて、事情つくしてやるがよい、内には内々だけのこと、たぶんの事いらん、やれ〜よかつたといふ理、ほんにけつこふやなあといふ理さへ、をさまればそれで十分である。

△明治二十八年七月十二日過日増野氏御身上御さし

圖よりみちの爲めつくしはてたるもの見分け引上の事情は人間心でとりきめ兼ます故、神様より御知らせ被下候ものや

さあ〜心の一つたすけあひといふ處は、その時の事情でそれ

〜尋ねでたらさしづにおよぼう、さしづもつてかうといへばたれがどうにもいはふまい、さしづもつてすればどんなものでもとくしんする、けふといふ日、その時の事情をもつて尋でるがよい。

△明治二十八年七月十三日愛知支教會事情に付榊井

氏永尾氏兩人出張の御願

さあ〜尋る處〜、ぜん〜もつて事情さとしたる處、どちらもおなじ理にさとしたる、どういふ事一つの事情、わからん〜といふはよう聞分、中にみんな互々の理をもつてよりあふたもの、中にさんらんいく〜、どうさとしてもわからん、どんなをさめかた、何程聞いたとて心に理がをさまらねばなんにもならん、をしへもきかず理もはずし、めん〜理をもつか

らはどうする事もでけん、をしへもきかず理もきかず、一時事情をさまつたかとおもへば、亦事情といふ、ぜひなきもの此の道といふ、たがひく理をき、こんであつまる、それからさきくをさまる理もある、なれど半分く七分く、そもくの理ではどうもをさまらん、ろつくに理をもつからろつくにをさまる、今一時よぎなくの理をもつて出してきたものをさめかたといふ、一時にはつこふまい、どうもさしづのしようがない、さしづ通りもちひねばなんべんでおなじ事、これようき、わけ。

△同時おして

さあくたいてといへばそれはどういふ事もをさめかた通であらう、出越したらをさまるやらうとおもふ心は受取る、なれど

よう聞分、どうもならん、さあくもう是迄の處にあちらもいかん、こちらもいかん、さきくそもくの心の理から理をうしなうてしまい、くもりくの中くもりはあぶないもの、又世界といふ理もある、國々處々にたぶんの理をおろしたる、日々はたらいてゐる、くもりくてははらす事でけん、にんげん心をまぜるからどうもならん、今一時でこす處、尋るからぜんくもつて理をさとしといふ、一時どうもさとしにくい、此の理をよう聞わけてくれ。

△明治二十八年七月十四日樺本梶本氏家族御屋敷へ

引越事情願

さあく尋る事情く、まあ一寸一つ、みなくの事情にてはどういふ事もだんじの上、尋る處どうせにやならんともいは

ん、いづれく／＼だん／＼その日事情く、是一つ事情、よう是
さとしてくれ、尋ねんからといふても、どうでもかうでもとい
ふ日がきたら、尋ねいでもさしづする、尋るからはまだく／＼は
やいといふ、さしづをしておかう。

△押而金錢を御助する願

さあ／＼それはもう、心にまかせおかう、それは何時なりと、
ゆるしおくによつて。

△明治二十八年七月十四日芦津分教會部下西の宮支

教會高橋、橋本兩人の事情につき榊井、永尾兩名

出張御願

さあ／＼尋ねる事情く、さあ／＼一度ならず二度ならずの事
情、どういふ事もをさまりてこそ道をさめてこそ道といふ、と

ほく處、だん／＼つくしはこんでもどるやいなや、やれかへつ
たか、やれもどつたかとゆふてやつてこそいたかひもある、又
やつたかひもある、かへつても一つの理のをさまりたる處へは
いられん、よられんといふやうな事では道ともひろめともいへ
ん、此事情大變の理であるから一つ事情はこんでやるがよい。

△同時おして今日より出立致します

さあ／＼それは道の爲といふ、かうといへばそれは十分の理に
ゆるしおかう。

△明治二十八年七月二十三日政甚氏縁談舊六月八日

にとり結願

さあ／＼尋る處く、ぜん／＼もつて事情といふ／＼理をゆる
したる、かうといふ處を尋る、すみやかなるさしづをもつてを

さめてくれにやならん、一時たづねる處はあざやかゆるしおかう、なにもたいそうな事はいらんで、たいそうはうけとられんで、兄弟くといふ、兄弟の中の兄弟の理をむすぶにはたいそはいらんで、ほんのかるくくほんにこれでこそと一日の日をさめてやらにやならん、ようこそこれでこそといふ理をさめてくれ、それよりまたくさき、一日の日といふ日をもつてさしづ尋てくれ、従前のゑんのとほりしてくれあらためた事はいらんで。

△同おして荷物の處御願

さあくもうかるくく心といふ理はいつまではたさるで、おほきいしても一つ、ひそやかにしても一つ、心といふ一つの理は生涯まつ代いつくの理といふ。

△明治二十八年七月二十九日（舊六月八日）夜十一

時頃飯降政甚氏小梅御結婚御盃つき終に至り御咄

し被下候

さあくかうして、さあくまあくこれまでおもいがけないく、みなくそれくけふであらうか、あすであらうか、まつたでく、さあく十分くさあくをさまるく。

△明治二十八年八月三日夜六月十九日政甚氏むこ入

に付大阪へ御出になり、小梅身上おさわりに付共

に御歸りの上御願

さあくたづねにやならうまいく、たづねるからはみんなさしづ、將來のさしづまでもする、よう筆にかきとれく、十分の中に身上一つこゝろえんといふ、どういふ事とおもふ、よう

聞取れ、まあかうして一つ外なる處の事情ともちがひ、をさまりともちがひ、めづらしい地場や〜といふ理も聞分にやならうまい、先方おやおやのはこぶ處の理は十分の理に受取、さあ〜内なる處よう聞分、事情これまで何度〜、いくへ〜たいへんの處もみのがしてやり、き、のがしてやりたる、今一時尋る處よりしつかり心得ねばならん、是迄はなんにもしらんからできた事やらう、さあ是からといふはしらんともいへようまい、さあしつかりあらため、しつかりをさめてようききとれ、むかしの事情やあるまい、今こふぜんの事情はみないふまで尋るまでのもの、目の前に道の事情理はみてゐるやらう、これから一つはなしかけるから、くはしい聞取れ、わからん處はたづねかやせ〜、おやといふ理を聞わけ〜、目の前だけのおや

ばかりやない、めにみえんおやもある、げんざいの親といふおやの理をみてをさめるならあざやかをやといふは三十年來どんな道かんなんくるしみの道を通りて、やう〜の日、又一人のおやはもう〜の日おみる事できずしてくれた事情はなんとおもてゐるか、なんと心得へてゐるか、これからすつきりとりかへ〜、あさはやくかどは掃除、これもながうとはいはん、五十六十までもせいとはいはん、此屋敷たかいひくいくべつはない、日々あさはとくよりきた、よるまでもはたらいてゐるものもある、此事情をみてさあす日より日くれになれば、水もうたにやならん、はたらきもせにやならん、つくゑにもたれてかざるやうな事はまだ〜はやい、よう聞わけ、にち〜はたらかねばぞんめいつなげんといふものの事情をみよ、兄弟三人

めんくはばつし、あねといふ、おやともいふ、世界並からいへば戸主なれど、神一條の道では効をつんだものがそれだけの理といふ、らくくの道はまだくはやい、さあけふは一日どこどへ行てこうかといふやうになるのは、効能の理をつんでからの事、まだく席をあらためてかざる事ははやい、なれど事情によりてはみのがす事もある、おやにいふ理を聞わけ、二年三年やうくの日もみずしてくれた、おやをしやんせよ。

さあくあすからは兄弟といふ理をもつて、あちらこちらと理をわけるやうな事では天の理がゆるさん、おやがかんなんしたならこそ、めんくけふの日といふ、はたらきとこふのふとつんでこそめんくの道、おやくのつくした理によつてむすんだ、此へんといふ、いんねんなくしてよられるものやない。

△政甚氏より是までだんく心得達の處神様へおわ

びなされし時

さあくこれまでの處はわからずしらす、けつこふだけ不自由艱難の道がわからんからした事、いままでの事情ゆるすならこそ、みなくだんくはこんできた事情、さあくこれからやでく、あすからやでく、おやは三十年來の道とほりていつ何年になりたらかうもどうもといふ理をたのしんでとほりてきた理をおもへ、うそやないほどに、さああすからはあさも早くおきて、むさくるしいしごとは人にはささん、めんくするやうはたらくやう、あすよりはあさあちらへ行て、ねいさんおはようといふ言葉一つの理をかけ、兄弟女といふても一人のおや、くれてからおやのかはりとなりてはたらいてゐるばかりや

ない、ゑんをむすんでもさきの事情みぬいて、神がつれてもどりちやんとつとめさしたる、さあ〜あすからばんじしつかりあらため〜。

△明治二十八年八月十日（舊六月十九日）前川氏本

局より電信にて申來り上京の願

さあ〜尋る處〜、これはよぎなく一時のぼらにやならん、一つ萬事事情さしづして元といふ道筋〜、だん〜事情どういふ事、とりはかり〜又一つ事情、處〜事情あつてでこす處、なんもなく一つ〜の理をさまるほどに、とほる處さしづにおよぶ、一つみればかゞみといふ、身がかがみではい、心がかがみ、さしづでたならかいしん〜、あらため道をあんじる事いらん、心おきなう行てくるがよい。

△明治二十八年八月十日（舊六月十九日）増野正兵

衛身上御差圖依り會計員多用に付増員して貰ひま

す事で御座ます哉の願

さあ〜尋る處、ぜんもつて事情さとしたる、一名より萬事みなだんじ、たれとたれと事情あらため、二人の理あつまる、三人よればかるくにして、一人が二日三日事情あるともしれん、何事もついいひ〜日があつ、月があつ事情心得の爲までしらせおく、あちらとんとあつたらん、どんな事一つからあんしんまんぞくさ、にやならん、みな事情早くをさめてやつてくれるがよい。

△明治二十八年八月十日（舊六月十九日）御差圖の

後に御咄し有り

さあ〜一寸もうじふん〜、刻限でしらせたい、さとしにくうてどふもならん、みなこれまでふるい〜たよりもなければ、さき〜のたのしみ聞て年間たちすぎて、まあ日々何にもあんじる事いらんと、それにはみなそへものま、あつてふるいものぞき、ふるいものもとへかへり、男女によらん、長い道すじをもんかたなき道を聞て、一寸世上同じ事にけつこふの中、日々といふ、そこでみなだんじ〜をさまる理もあればをさまらん理もある、これが一つの心が、り、男女によらん、みわけてやつてくれにやならん、聞わけてくれにやならんで。

△明治二十八年八月十九日（舊六月二十九日）簞の

北田地一町三反餘買入れる事御許し被下候哉御願

さあ〜尋ねる處〜、地所〜といふ、一時たいもふといふ

てある、たいもふといふやたいもふなれど、なる時ならん時一つ、一つなる時みわけてむりにどうせいはいはん、なる時ならん時そこでしゆんといふ、一つ年をまつて事情といふ、おほくの中也どりくる、地所せまい、これはおひ〜さしづもつてはこぶ、それはどうせにやならんときかしにくい、長い心〜これだけ〜年限たてばこれだけ、又これだけといふ、又一時事情といふは、こくびをかたげて事情、そこでなすは〜ことしにだけねば又來年、むりしてはならん〜、年々あちら一寸こちら、一寸おほきいなる、みな木ぼくの大きくなるやうなもの、これだけ一寸さしづしておかう。

△押て買入は御許被下ます哉

さあ〜これはたつてといふはゆるさんではない、かず〜あ

る、年限たつたらふしから目がでる、むりは一寸もでけん、むりしてはどうもならん。

△明治二十八年八月二十三日（舊六月二十二日）籤

の北の方田地一町三反餘の地所買入約定致ました
が御許被下候御願

さあ〜尋る處〜、ぜん〜もつて事情さとしたる、一時もつてかうといふ處、とめもせんす、めもせんといふ、一つかうとなつた事情は受取、その事情せかいたいそうさすやない、一年でいかねば二年、地所いかんといふやない、たいそうといふは、一年二年ようき、わけ、どうしたんやしらんといふは一つの道、さあ〜受取る〜。

△明治二十八年八月三十一日（舊七月十二日）御本

部裏籤發き東西北へ堀する事御許し願

さあ〜尋ねる事情〜、さあ〜だん〜、それ〜あらあら、地所一つ〜、事情はじまる、又かさなるぼつ〜事情かゝる、ふしん心おきなうか、れ、さあ〜ゆるしおかう〜。

△明治二十八年八月三十一日（舊七月十二日）御本

席様御齒の御障りに付御伺

さあ〜まあせかいの處あつまる、一日の日のびる、どういふもの、ほんのつはなしうつれば皆おもふ〜、理がかゝる、しばらく順序としてみなかゝる、長い事やない〜。

△押て日々の御席の事であります哉

さあ〜まあ萬事の所にて尋にやわからうまい、萬事これまでちよい〜さとしたる、さとしたる處にさとりついたるものも

ある、又中にさとりつかんものもある、わからにやどうもならん、はなしかけたらはず、又あとくあざやかさとす、みならもれるく、うもれる理にうもれる、うもれる理に何の理あるとおもふ、これからはなしかけたらすみやかはなしかける、けふの日これだけはなしおく、うもれてあるく、どうもならん理うもれてある、うもれてあればなにしよう、いふてもでけん、そらかつてやく、心に理がある、かつてはめんくの理にかゝりてあるめんくの理にこれだけだしておくと、これだといふ、これから席のたびにだすによつて、これだけはなししておかう。

△明治二十八年九月十五日東分教會整理の爲め前川

氏平野氏御出張の御願

さあく尋る處く、どうもこれく一時の道が一つおさまらん、どうもをさまらん、一寸みればそれはをさまらうまい、理をもつて治めにや何べんでもをさまらんぜんくの事情からだんくよぎなくの道もとほり、どんな中もこしてどうなりかうなり、日月年限の事情といふなれど、今の心であればどうもをさまらん、一時始めた理はけす事もうづめる事もでけん、やうくの日が立つてやうくでけけたる、一時にんきがわるいについで治め方がでけんといふ日きたる、自由用といふ日がなくばならうまい、一人二人かはりての事情なら一時すみやかなる處の理をさとす、よう聞きとれ、そこなしにはなんぼすんだ水でも入れる事はできやうまい、そこがありてこそ、なむくながら水がもれたる、此の理をよう聞分け、をさめかたに

はどうでも一度いかにやらん、どんな事もおもい理も一つはなしの理によりてかるい、神一條の道の理をしやんせよ、たふさうとおもへば、わが身たふれる、こかしたらこける、よう聞分、今にたふさうかといふ理をもつてゐるものもある、一時ならにやなるやうにしようかといふ、一つの心をもつてかゝらにやらんで。

△明治二十八年九月二十日（舊八月二日）御本席元

御住居所中南にたき場所取除の願

さあ〜尋るところ〜、もうどこもかしこもごむさい一時に掃除せにやらん、どういふもおもい一度すつきりはどなうの理およんである、こゝもかう、こゝろおきなうしてくれるがよい。

△明治二十八年九月二十日（舊八月二日）教長様御

屋敷ませまに付外へ建築御許の願

さあ〜尋る處〜、もうどこかしこ一時に屋敷あちらもこちらも取拂、一時今一時もつて尋る處、何時事情うつる處、これでよかる、みな一つ事情心にかゝる、せばいほんのかりならゆるさう、相當の事ならまだ。

△明治二十八年九月二十日（舊八月二日）只今の御

座に續て御座敷を二間程建る事御許の願

さあ〜ぜん〜、今したからあすとらにやらん、これもかうせにやらん、けふしてあすとる、ほんにせばいなんどき、その心はいなら、何時なりと、けふまでながい、よう身のかんしん、それをみる、又おくれる今してあすとる。

△又跡より御聞せ被下候

さあ假家く、事情にも假家にねんが入すぎる、そこでひまがいつてならん。

△明治二十八年九月二十二日中山様身上御願

さあく尋る事情く、いつまでもくいつまでもおもふ心、それく内といつまでくおもふ心、身上事情せまりくる、もうどうであらうく、一つ尋る、一人の心の理さとししよう、是迄の處一人どんな事、心でもつてどういふ事、どんな事もこんな事もしつてゐる、これまで事情にしてはわからずく、みな小供ばかりとつて身上事情でけたならどうもあすといふ、さきといふしばらくさとす、ながいあひだでないく、一寸わかるまいく、なれどこれまでの處どの理きたる處、一つさとし

てたんのふく、たんのふつたへてくれ、何ものこしてどうといふことはない、まあ内々はやくといふものあれば、もう三年といふそら人々の心、もう一年といふ三年といふ、そら人々の心、ながらへてといへばいひやうくなれど、もう一時しばらくこれだけ、みな小供にしらしおくがよい。

△明治二十八年九月二十七日御本席様御身上腹痛み

治り又本日右の足痛みに付御願

さあく尋ねくれる、尋てくれるは、又事情、さあくどうもこれき、わけにやわかりがたない、日々これよりまいにちつとめる、又どういふ事とわかからうまい、身上ふそくありて、一日の日つとめる事できん、なれど事情によつてつとめにやならん、足があゆめんとすれば、すつきりならん、よう聞わけ、

まだこれからおほくの中かゝり、日々うかゞひにくる、かゞか
ずあれば、一席二席三席といふ、ちゞめてはつとまらん、よう
きゝわけ、一日つとめば、何日ぶりもつとめるをさめさす、よ
うきゝわけ、ぜんくゝよりつたへたる心にをさめある、一席の
内三席、事情といふくゝ、ようきゝわけ、ねがひによつていろ
くゝある、なんぼいろくゝありても、いやとはいはん、さしづ
におよぶ、ようきゝわけ、ねがひしよところくゝをさまる、と
ころ地所といふ、これならといふ、教會地所ならゆるす、地所
買入といふ、よう聞分、今の處すんだ、一つだんくゝほつてお
けばしまひにはもうねがはいてもよいといふやうになる、地所
からそれ一つ買入、一つ萬事ゆるしだしてある、これからさき
心え一度の處、二度三度まかさにならん、しんの處よくきゝ

わけにやならん、席によりて何席つとめる、でてする事は何席
でもつとめさす、何日になりてもなほらんやうでも、あす日す
みやかつとめさす、是神の自由用といふ、身のさわり尋るから
さとそ、又何席一席三席にむかふ事情ある、よう聞分、つかい
どくのやうな事ではならんでくゝ、みなくゝこゝろえのため、
しらしおく。

△明治二十八年十月七日夜刻限御咄

さあくこれくゝ、こんやといふこんやは、すつきりした、さ
しづどんな事もさしづ通り、もちひらねばならん、どういふさ
しづするなら、日々せわしい、いそがしいといふは、どういふ
處からせわしなる、みんなでくる、まんぞくをあたへる、ま
んぞくの理が、世界今迄けつこふはわかりてあれども、この理

がわからん、たぶんの人が入こむく、これからなんぼういりこむやらしれん、どこからで、くるやらわからん、世上にてはそふぢをしかけた、どつからどういふもので、くるやらわからん、いつともわからん、わからんさきからさとす、あつてからさとすやない、さしづ通りみななりてくる、あらくは今迄わかりてある、おほぼうのやうなもの、これから日々日がたてば、どういふ事もはこばにやならん、むつかしい事を一寸はなしかける、どういふ事はなしかける、なにほだみのさわり、いくへくなんぼうさしづしたとて、さしづはそのばかぎりどうしたらよい、かうしたらよいといへどみなそのまゝ、さしづなくとも、かつてだけはようできる、さしづ通りできん、さしづ通りできたる事もある、でけてもふしようくだらけ、あちらは

らたて、こちららはらたて、一つの理にをさまらん、たがひくの心さへみんなはなしあふなら、一時の理にをさまる、このみちは、おれがくといふたて、みんな神の道、神がはたらけばこそ日々のみちである、それでむつかしい事はじめかける、年限くどれだけ年限といふ、年限のたつたものでなけりや、よう木にはつかはれようまい、ねんげんのたゝぬものは、よう木にはならん、年限のたつたものほどつよいものはない、よう木といへば、普請なんぼどれだけきれいなといふても、わかいの、ほそいものではもたぬ、年限たつたものなら、なんぼうふしがあつても、いがんたものでも、こたへるおもりがこたへやでく、そんならほそいものはまにあはぬといふ、ねんげんたてば、年限相應だけまにたつ、年限のふるい用木ではそろは

ん、あとくたらぬ處は、ねんげんまつよりほかはない、ねんげんたつたならこそ用木といふ、用木はなにほどいらつてもいかん、そこでこれどうしようかと、かうしようと、めんくのまゝといふやうでは、せかいのまゝにいかん、どうしたとてできるものはできやせん、じつとしてゐても、できるものならできる、どうしてくれとも、かうしてくれともいはん、ことば一つが陽氣ちからなら、どうする事も、もどす事もできん、みんなそれにもたれくして、わかきがそだつ、せかいになんぼそだつともわからん、さうしたらせかいどんな事できても、こはい道はない、これからせいてくどこまでせくやらわからん、世界にはあたらしい道は、千筋もできてきた、どんなよう木できるやらわからん、あちらの國からよう木、こちらの國からもよう

木、谷そこにもある、ひくい處からひきだすには、ひきだしにくい、高い處からひきだせばはいく、高い處の用木は、するくとおりてくる、どんな用木よせて、どんなしごとするやらわからん、ちいさい心はやめてくれ、うたぐりくの心はやめてくれ、ほしい、をしい、うらみ、そねみのこゝろはやめてくれ、そこでせき一つの理をよくき、わけてくれ、これ一寸たつた一こと、はなしをしておくで。

△明治二十八年十月十一日御本席様四五日前より御

身上御障りに付本日御本席に相成候上御願

さあく一寸尋かける處、尋かけるは一つ事情、いかな事、はんじさしづもつて、さしづにおよぶ、なんでもかでも理をだいたいとして、たててゆく理にむかはんやう、さからはんやう、これ

だけをさめかけたら、どんな事でもをさまる、世上に理があれば、どうであらうといふ、おもくおもふはめんく、心に理があるからあんじる、どんと心ををさめてくれ、道の理ふみかぶりなきやう、世上に理をおろしたる、理をき、わけ、をさまるをさまらんといふは、心からやう聞分け、文字もわからぬものでも、道につかふ理をき、わけ、處にはめいしよおろしたる、そもくからをさまらん、一つのしんがもとである、しんがくるふからまちがふ、まちがふからをさまらん、二度三度はこぶ理を聞分け、もと、いふ、地場といふは、世界もう一つとないもの、おもへばおもふほど、ふかき理、ふるいものうもれてあるといふは、やう聞分、人間の心ではわからん、わかりかけたらわかる、ふるいものは處々、また處々でるにでられんといふ、

やう聞分、理の取やうでかるくなる、出てくる理は神の理でなるとき、わけ、たれかれは一寸にはいはん、ほんにこれはなるほど、かんがへだして、これとく、あざやかさらへてくれ、たれにかうして彼にかうせいとはいはん、理からか、りてくれ、いつからか、るともいはん、か、ればみなそだつ、そだて心をもつてをさめてくれ、あちらに一寸かこゐがあつて、これがどうも一つ、とんとあざやかならん、これき、わけ、るなら、何もあぶなきこはきはないとさとしおかう。

△同時上田奈良系様の事情願

さあく、尋ねる處く、尋ねてくれねばわからせん、一名の女く、何ほどの理何ほどのもの、どれだけの理とおもう、なんべんのさしづくりかへしく、さとす處、是れまでの事情、と

んとわかりがたない、ようき、わけ、そたてばそだつ、ぜんくゝの理にさとしてある、そだてかたみんなたのむくゝ、女人もらふ理は他にないで、他にもらいかへはならんわいくゝ、年限たてばついくゝわかりである、なんでもかでもつたはる理をこしらへておかねばならん、神のさしづといふ、みなおなじ事をさとするのや、なれど一つの理にをさまる處をき、わけ、是れだけさとせばわかる、又あとくゝ、つゞく理をこしらへておかねばならん、つゞかんやうな事では、此道をとらすか、くもらすかの道よりみえやせんでくゝ、にんといふ、どれだけのものといふやなし、みなおなじ人間である、なれど事情の理からみれば、うたがふ理はあらうまい、よう聞分、入こんではなしをすれば、にんがかはりてあるだけやで、理は同じ一つの理で

ある、これよう聞分てくれ。

△同時奈良系様内々の治め方御願

さあくゝまあくゝ、かくるいふてまあとうぶんといふ、治めかけたらをさまる、まあくゝあそびがてらといふやうな事情とをさめてくれ、十分をさまりたら、いのふといふてもいならせん、これだけさとしおかう。

△同時諸井國三郎氏を本部員に引上る願

さあくゝ一寸はなしかけたら、それくゝだんじの理も出て、みちがあく、あいたらさとさうとをい處、始まりの理に取てもおもいものなれど、おもいかるいはいはんかうもせにやならんかといふ處は、十分の理であるからゆるしおかう、まだもう一つあるくゝ、理によつてどうもくれてしもたくゝ、なれどあとあ

と理はつながつてある、前々一時どうしようしらんといふ處、あんしんしてつくした處をおもへば十分の理である、あとはたつたるなれど、これも一つの理にをさめてやつてくれにやならん。

△同時上田民藏本部へ引寄る願

さあ〜みなこれ一つ〜、心にかゝるだけは、理がかさなりであるから、心にかゝる、これ一つ十分ゆるしおく。

△同時西浦彌兵衛本部への願

さあ〜これも心にかゝるやろ〜、どうでもかうでも、心にかゝるだけは、あんしんの理にゆるす。

△同時榊井政次郎本部への願

さあ〜これもなあ、年もなんぼうにもならん、年限もなあと

おもふやろ、なれどおやといふおやよりつゞく理、是も一つ、心にかゝる理であらう。

△同時堀内典藏本部への願

さあ〜尋る處、これは十分今の處ではとんとどうでもあるまい、なれど十分の理がある、本部へどうせにやならんとはいはん、どちらでつくすもおなじ事、十分の理ををさめてやれ。

△同時松田音次郎本部員に引直の願

さあ〜尋る處〜、これらは一つの理といふ、ながらへての間、およばんながらでも、山をこへ、だん〜はこんだる、まだそのまゝの心でつくしてゐる、尋る理にゆるしおかう。

△同時村田幸助本部への願

さあ〜これも一つ十分である、なれど一けんの内、いくし

よたいも、もつといふたる、なれどかうといふといへばその理にゆるす。

△同時松尾をはる御願

さあ〜だん〜、事情を尋ねる、人々の處、これも内々にはかうといふ、なれど地場にいつまでといふなら、又々をさめてやつてくれにやならん。

△同時身をかくしてと御聞せ被下候は何方様で御座

りますか

さあ〜身はかくしてゐる、なれど一人の小人を残したる、このもとをようき、わけてくれ、内々さほどのものもなき中、あんしんして、だん〜つくしたる理を、しやんしてくれ、今の處、内にも一寸はじめかけてゐる、くれたもの、理より、地場

の名義も、一つおろしてやつてくれにやならん。

△押而前川喜三郎で御座りますか

さあ〜それは尋處〜、方角はころつとちがふたる、山をこへて西にある、今の處、ふしんか、りてゐる、はやくをさめてやりや、おほいのためになる。

△大阪網島寺田で御座りますか

さあ〜尋ねる處、どうなりかうなりの理がわかりたか、十分〜どうしようしらんといふ處、いづれ〜ほつておかんといふて、たのしましたる、やう〜の日がくる本部へ一つの理をよせてやるなら、あざやかといふ。

△押而本部へよせまは小人で御座りますか

さあ〜いまはまた小人たる處、今はおやとかはりて、十分た

んのふさしてやつて、くれにやならん。

△同時増野氏より會計上の事情御願

さあ〜みなをさめかた〜、をさめかたがむつかしい、なにもむつかしいやない、みなめん〜のもの、おもてか、ればむつかしい事はない、あれとこれとあつめるのは、中々の理やなけりやあつまらん、めん〜これだけの理をあつめるのは、たのしんでくれ、道なき道はわかりやせん、どうしたいかうしたいといふても、できるものやない、又はいつた處がわかりやせん、これようき、わけにやわからんで。

△明治二十八年十月十九日（舊九月二日）寺田氏孫

ゆく〜本部の方へ引寄てといふ處から親寺田氏

たんのうして貰ひましたら御願

さあ〜尋ねる處〜、おほくの中にその中にこれ年限たつた、おほくの年限さとりなる時はなんでもなる、ならん時はならん、親子一つ理あり、なる時ならん時、これ一つあがやわかるならわかる、そこで小兒のこしをいて身をかくれたる、親といふ理ありてかくれたる、親がつくそ、どうかつくさうといふむつかしい、むつかしい處せいしんにとゞまる理は末代の理にとゞまるやうにはこんでくれ。

△おして

さあ〜をさまりは末代理やない、今の理やといふは、一つたすけたらみなたすかる〜、これまでどうもならん、よきものたすけよい、その理はくらい道あらねば、くらい日あかい日はどちらみてもみえる、みてたのしむは大へん事情ととらねにや

ならん、これからさしづしたならみなわかる。

△明治二十八年十月十九日（舊九月二日）分教會長

より先々神實御治めの件御願

さあ〜尋る處〜、是も一つ尋ばさしづにおよぶ、いつ〜わからん、一つさしづ一どことのつゞく、これまでかはらん處から、一つ道かい、分教會は大きいしるし〜、大きいものは大きい、又それからさき何代事情まあ〜支教會は元の分教會から、そのさき又ちいさきもの、かたならべるやうなものみえてある、とほい處中にかうしてもらはいつでもよいといふやうではしんの理わからん、おもになるものわからんやうではならん、みんなさうとうといふ一つ理をこしてみ、これだけさしづすればみなわかる。

△おして

さあ〜支教會といへば分教會つき、一寸ゆるすは一つ、そこまで十分はさんでやらにやららん、そのさき二つある〜は、すそは支教會からまんぞく、またかうといへばすゐぶん理、又そうせにやららんいへばたいぎ理おこる、その心ではこばにやならん、さあ〜一つさとしおかんらん中にあらうまい、なれどすゐぶん〜又そろかいかうといふはずゐぶん〜かくしてあゆむだけあゆみ、かくして中に生涯一度の事といふは、親からさしとめ、大さうしてはならん、ようき、わけ、かくすればかるい、かるい理はなにほどおもいともわからん、中にからまれたる理ある、めん〜むすびこんで生涯の理に治めてくれにやららん。

△明治二十八年十一月五日御本席様三日前より身上

御障りに付御願

さあ〜尋る處〜、さあ又尋ねにやならん、事情日々かはらず〜、事情はこぶ事情といふはなんともなき日をおくる、一寸事情〜、一寸とまれば、とんとはかりがたない、日々まつてる理はながい、いふてる間に日がたつ、事情はじめかけたらどういふ理はじめるともわからん、日々どれだけにむかふともわからん、日々おけるとさぶしいなるともわからん、ふかき理定めてき、わけにやわからん、何人よせた處がはかりがたない、やすまず〜は、あらひかへと、さしづしておかう、けふの處はなしかけたら、時々もつて尋ねにやなるまい、尋ねば治まる道をさとすそれによるならどんなこともできてくる〜、

心一つ理もつて、又々尋ね、一寸にわからん、これよくさとし
ておくによつて、よつくき、わけてくれ。

△明治二十八年十一月十三日日本部長様の御普請本部

員會議の上御願

さあ〜尋る處〜、さあ〜ぜん〜から尋ねかける處、みなかりやとさしづしてある、かりやといふはほんのかりや、い
つ〜迄のものはかりやといはん、十分すれば何時なりとする
といふわけにはいかん、かりやとしてどこへなりと、何時なり
とけふしてあすなほすといふ心ですれば、十分自由といふ、
又つゞきや〜といふやうでは、あと〜おくれる、そこでこ
ろよからう、どこがよからう、そらとりもちはこのでくれ、
又つゞき〜、つゞきやといへば、あと〜ひまいる、ふつさ

ふやなあ、いつそよそかと十分すれば、だん／＼おくれる、十年祭／＼、日をきりていふのはこれもよぎなくといふ、ふしんはとりかゝりたらきりなしといふ、これだけといふてきつてしもたらしまい、十年祭これだけせにやならんといふから、あと／＼おくれる、まだ／＼先々といふ心をはこべばたのしみやろ、いけ／＼や、先々長きはたのしみ、これからかゝるならん事もゆるす、みなこども、いふ事する事は、親はきく、心にくもりなく、上は上、下はあはれみは、どんな事もいかんといはん、よう聞わけ、みなかうしてといへばいかんといはん、むりな會議せいといはん、たがひ／＼心の理があはんから、一時限の處、二時限も又よがあける、あくる日といはんならん、それでは一つかゞみやしきとはいはん、こらかうしようやない

かといへば、そらよからうといふ理はうけとる、ようきゝわけした理は受取此やしきみないつ／＼まで、心といふ理をもつてはいつてある、どんな事もたがひ／＼はこんでたへよううるほうならいつ／＼までといふ、かたよるとねがさゝん、ねがさゝんと、目がさゝんと、さしづしておかう。

△橋本氏普請御願

さあ／＼みな／＼、一つはじめばみなはじまる、一つかりやといふ、七十五人人數そろふは一寸いかん、これからかゝる、こゝからしたらよからう、だん／＼すればひまがある、どんな事も親がはたらいて、子がたのしみ、みなたのしみとして、かりやといへばみなゆるしおかう。

△同時來年十年祭に付神樂損じてある處願

さあ〜まあ一つ〜、ふし〜のきり〜、かうといへば、
心だけ、心だけはうけとる〜。

△同鳴物の願

さあ〜それはみな心にまかせおかう、かうせにやならん、ど
うせにやならんとはいはん、どうせにやならんと、しゆん〜
時をもつてはこぶ處受取、たいさういらん、小供づ、ないめは
すつきりかけん、づ、なみはみてゐられん、みな心にうれしい
すれば、うれしいうけとる、うけとる理は、せかいなるほどと
いふ、これだけさとしおかう。

△明治二十八年十一月九日城甚三郎敷地買入の願

さあ〜尋る事情〜、みな〜それ〜一つの理はみなたの

しみ、一つの理いふたるはなし、ぜん〜よりいふたる、そん
な事できるしらんといふ、日々たつたら一寸あちらでける、こ
ちらでける、さしづしてある、みなそれ〜をさまればきつし
りつないでくれ、まだ〜どこまでいくやしらん、みなしらし
ておかう。

△又敷開き塀石垣の願

まあ今の處これだけ事情〜、まだ〜どうでもおよばすこれ
き、とつてくれ。

△裏の門御願

さあ〜まあ尋ねば一つさしづしておかう、かこひせにやなら
ん、一時もつてどうといはん、一つはこべばでける、もうひろ
く日々人がおほくなる、ほんの古い事おもへばいさんでくれ

く、このはたらき一つうたがひはない、日々席やすめばどうとおもふてもならん、席は日々理とほき處をさまりくる、この理なるほどとおもへばほんになるほど、どんな事しかけるやらわからん、ひとりなりてくる、せかいをさまる、もうふそくやないとおもへばふそくになる、いさめばどこまでもいさむ、心いづめばいづむ、いつまでもいづむ。

△押て

さあ〜そら、だんじの理みなうけとる。

△明治二十八年十一月十四日教祖殿の御普請御許願

さあ〜尋る處〜、さあ事情さとさう、これ〜ようき、わけ、もうこれ十年祭〜十年祭とおもふも一つの理おもはにやならうまい、ようき、わけ、元といふ、どういふもの元のふし

んでけん、どういふものこれがせかいの大道やで、さき〜そだて、せいじんしたら、どんな處からどういふ事できるやしれやせん、なんにもわからせん、もう十分こどもせいじんしたら、おもふやうになる、せいじんなかばで、しあんといふ理でかけたらどうもならん、處々なるほどの理をさまりたら、一時になるならんともいはん、おやといふ、こどもといふ、こども十分さして親がたのしむ、子がせいじんしておやがたいせつ、たのしみと〜といふ、世上をさまりの理、十分の事が一どきにをさまる、かりや〜、日々の理にいる、どうしてかうしてふそくともいはん、おもはせんで、せかいこどもせいじんをまちかねる、あんじもなきいつのまになつたといふやうになる、内々の處どうでもかうでも、地所あつめかけたる處、たいてい

くもうすこしの處、じきにあつめさしてしまふく。又一つみんな存命中のたちや、ふるもそのま、べん所もそのま、日々もりをつけてゐる處、存命も同じ事やで、又内々はたらきゐるものだけ、かりやくたてかけるがよい、ゆるしおくでく。

△押て願

まだふつごうやでく、ようき、わけ、どういふもの、十年祭がきりやといふ心、どうもならんでく。

△押て教長様御普請願

かりやく、かりやにか、りてかりやの心をもつてするがよいく、かりやく、その日くにあるものや、ようき、わけてくれく。

△明治二十八年十二月二日來年教祖様十年祭に付多

くの人の爲、教祖様の御殿裏の方へ假にこしらへ

て其所へ一日の御祭り致度處御願被下候御願

さあくたづねる事情く、さあくぜんくからたづねる事情、皆さとしたる、おほくもどるく、ひろく地所いるとさとしたる、どれだけありてもまだせまいとさとしたる、まだこなこつちやないく、ぜんくさとしたる、地所はおそなりたる、何程大きなともわからん、あつかひ地所にもとめさしたる、とりあつかへば萬事あつかひ地所かうしたらよかる、あしたらよかる、萬事あつまる地所といふ中に、事情あつかへばかうしたらよかるどうしたらよかる、みなくのだんじせいしん一つの理に萬事まかせおかう。

△明治二十八年十二月五日征清軍隊凱旋に付奉告式
 并に弔魂祭本部にて執行致し度にて地方有力者
 及第四師團將校等を招待致度にて教長心得迄に
 御伺

さあ〜尋る事情〜、世上いくへ〜事情とき一つ事情おこ
 る、はやく〜事情さわりわからん、この事情さとしてある、
 なにもさとしたる、その日ながいあひだ日々のさとしたる、今
 一時ある、ふるい事情ぜん〜わかつた、ほんになるほど日々
 たよりこれも一つはなしのか、りとりしらべて、かういふ事一
 つのこゝろ、今一時の事情合してある、今一時世上の理を尋ね
 る、どうせいかうせいしたけどそこへ〜一つの事情のせか
 い、みな心があふた事にまかせおかう〜。

△明治二十八年十二月五日市川城法支教會長辭職書

差出せしに付て、度々就職勸告致せども敢て辭職

申入に付如何に取計ひて宜敷哉心得迄に御伺

さあ〜尋ねる處〜、さあまあ一寸一時の處かういふ、いつ
 〜はこんで一つ事情とんとうるさい、おもふこゝろとりなほ
 す事できん、かうしたこゝろがどうもならん、心をうしなふ、
 なにいへどこたへてどうといふたものも、みなかはり〜理を
 はこび、たがひ〜一つの心をはこんで理をはこんで、かはり
 〜どうなりかうなり、十分どうもはなしもきかしてつなぐ、
 むかふ心が切てか、ればどうもせひがない、まあ一度は二度三
 度、心をもつてつないでやつてくれ。

△明治二十八年十二月十六日本部の大裏地所ならし願

さあ〜尋る處〜、事情おひ〜、皆よりあつまる處といふも、せまふてならんといふ、どうなりかうなり、そこい〜はじめかけたる、一時もつて尋る處、それはぼつ〜にか、らにやならん、何時たぶんの人、どれだけ人がよるともわからんでは、是も一寸はなしておく、そこい〜一寸できかけたる、それは十分にならし、一寸これだけといふは、かこひもせにやならん、そこでだん〜、又尋るならおもふやうになる、地ならしはそれ〜、かうしておかうといふだけは、ゆるしおかう。

△同時十年祭神樂御勤めはかんろふだいに致しま

すか御伺

さあ〜尋る處〜、元々一つか、りかけたる處がある、處が

かへてかうといふ、ひろくとおもふ處、一つはじめかけたる處がある、みんなそれ〜わからんながらの咄しつたへたる、あちらも一寸聞わけ、こちら聞わけ、やう〜できかけたる、處をかへてかうといふ處はじめかけ、元々しんといふ理は、かへる事できん、廣い理でしたらとおもふは理なれど、元々せまい處よりはじまりた、十年祭につかへばしまいのやうにおもふ、まだ〜か、り、廣い處一寸こしらへた、おなじやしきといへば、まんぞくするやろ。

△押て祭式だけ北うら空地にて行ふ事

さあ〜それはかまはん〜、一つのしんの理にかまはん、身分さうとうの理もあるやろ、それはかまはん。

△同時本部十年祭より一ヶ月あつて各分支教會十年祭行ふ事

さあ〜それはもうこれはなしの通り理である、みぶんさうとうといふたる理でわかるやろ、どこそこはどうしたさかいに、どうせんならんとおもはんやう、いはんやう、をさまる處、しんの理だけうけとる。

△同時十年祭の時御勤人中着物黒もん附つむぎにて新調する願

さあ〜尋る處〜、それは心にまかせおかう、ならん事せいといふた處で、できやせん、これだけかうしたらと、たのしんでする事は、ゆるしおかう。

△引つゞいてさとし下る

さあ〜一寸萬事の事にはなししておかう、おもふやふについている、きられるといふ理をさとす、今尋た處は心だけゆるしおいたる、そろへてかうしようどうしようといふ理はけつしてならん、おもふだけ心だけの理をうけとるのや、おもふやうにして、らくのやうにするのやない、ならん事せいといふのやない、これだけの理に、つゝしみの理にもつてくれにやならん。

△明治二十八年月日不明

さあ〜尋る處、さあ〜どうもこゝろえん、わからうまい、とほく處であるからほんの一つの事情、どういふ事もかういふ事もわからうまい、身に一つ事情もつてさとす、いま一時の處あんぜる處はないで、身上とほく處でこしてふそく、心えん事情である、なんのようである心えん、どうでもさあ〜どうで

ももどりがいそぐぐ、はやくもどらにやならん、一時にもどる心をさとしてくれにやななん。

△おして

さあぐ早く一日も早く、心を定め、さあぐ尋る處それは一つ、一時のはなしをきけば、たれなりとも一時、一つはこんでくれるがよい。さあぐ尋ねる處すぐにかうといへばたつがよい。

△明治二十八年月日不明

さあぐだんぐ事情尋る、いかなる事情も尋ねにやならうまい、どういふ事もできる、さきぐ出来る事情、大きなれば風といふができる、どういふ事もそだてとほれ、かたきでもかたきにせず、一つといふ最初はじめの事情、みても立てもいられ

んとおもふ處、一つたすけるも一つの理、又候々といへば一つの理をあつめて一つ事情、やう心をさめてくれた、又候々一つの理であきらかもみにやならん、一つの理ところぐ道すがら心をさめ、あばれるなにもならん、聞けば聞くほど身をはめる、かはいさうなものや、一名一人の心、一つめいしよ一つの理、二度三度一つの理ならわけにやならん、道筋の理をさとし、心をさめてやるがよい。

おさしづ (明治二十八年) 終

昭和三年一月廿九日印刷
昭和三年二月一日發行

非賣品

奈良縣山邊郡丹波市町字布留百十二番地

編輯兼 天理教同志會
發行者 代表者 田邊要藏

大阪市南區藤谷中之町三十九番地

印刷所 會社中 村盛文堂
代表者 岡本省三

不許
複製

終

